

落合町埋藏文化財発掘調査報告

福 田 A 遺 跡
高 屋 B 遺 跡

1983. 3

落 合 町 教 育 委 員 会

序

わが落合町には、数多くの埋蔵文化財があります。それはこの地域が、人間の住みやすい場所として、古くから開けていたという落合町の尊い歴史の証しであり、私ども落合町民の大きな誇りでもあります。

地域開発は、時代の要請ではありますが、その名のもとに、埋蔵文化財がこわされたり消滅する事は誠に残念な事です。

このたび、町内でも有数の埋蔵文化財の宝庫である天津地区において農業構造改善事業が実施されるにあたり、発掘調査を行うことになりました。調査は保存を第一として最小限度に止め、設計変更の不可能な高屋遺跡4600㎡、福田遺跡4000㎡について実施いたしました。

この発掘調査につきましては、岡山県教育委員会の絶大なるご指導、ご支援を頂き、更に関係諸機関、地権者の皆様方には格別のご理解、ご協力を頂き、深甚の謝意を表する次第であります。

また、直接この作業を担当されました調査員、発掘に従事下さいました方々に、厚くお礼を申し上げます。

これが、学術研究、本町歴史の解明、更には文化財保護につながり、郷土愛に昇華いたしますれば、これに過ぐるよろこびはありません。

昭和58年3月

岡山県落合町教育委員会

教育長 片岡甲子郎

例 言

1. 本書は落合町教育委員会が昭和56年度、57年度国庫補助を受けて実施した「高屋B遺跡、福田A遺跡」の発掘調査の概要報告書である。
2. 遺跡は落合町大字高屋に所在する。
3. 発掘調査は「高屋B遺跡」を県教育庁文化課職員松本和男が、「福田A遺跡」を森田友子松本が担当した。発掘調査は「高屋B遺跡」が昭和56年5月8日から10月9日まで、「福田A遺跡」が昭和57年4月15日から10月23日まで実施した。
4. 発掘調査は岡山県教育委員会、落合町役場、落合町文化財保護委員、地権者等関係各位より絶大なる援助を受けた。とりわけ下記に記した高屋地区の有志の方々には、夏の炎天下で発掘作業に従事していただき大変お世話になりました。記して謝意を表します。
5. 遺物の整理は「高屋B遺跡」については松本が、「福田A遺跡」については森田が行った。なお、遺物、実測図、写真等については落合町教育委員会において保管している。
6. 本報告書の執筆、編集は「高屋B遺跡」を松本が、「福田A遺跡」を森田が行った。報告書の作成にあたっては吉田悦子、森 美和の協力を得た。
7. 本書に使用したレベル高は海拔高である。方位は第1～4区、高屋B遺跡第27図は真北、それ以外は全て磁北である。
8. 本書第1図に使用した地形図は建設省国土地理院発行の25,000分の1地形図（津山西部、勝山）を複製したものである。
9. 第1章地理的、歴史的環境、第2章調査の経緯については『岡山県教育委員会「高屋B散布地、福田A・B散布地」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告（45）1981年3月』を参考にした。

調査補助員 鶴 沢 裕 美

発掘作業員 芦 田 晴 夫、芦 田 与 志 夫、安 藤 冬 子、石 田 大 一、
井 尾 二 五 男、大 戸 正 一、大 戸 貞 男、大 戸 す み 子、
岡 田 真 一、岡 田 薫、岡 田 晴 志、岡 田 栄、
岡 本 博 子、古 谷 日 吉、古 谷 札 子、酒 井 寿 子、
菱 川 文 子、菱 川 千 重 子、（敬称略、アイウエオ順）

目 次

第1章	地理的, 歴史的環境	1
第2章	調査の経緯	2
	調査日誌抄	5
第3章	福田A遺跡	10
第4章	高屋B遺跡	66

図 目 次

第1図	周辺遺跡地図 (S = 1/25000)	3
第2図	圃場整備後の福田A, 高屋B遺跡周辺地形図 (S = 1/4000)	7
第3図	福田A遺跡, 高屋B遺跡周辺地形図	8

第1章 地理的、歴史的環境

福田A・B散布地、高屋B散布地は真庭郡落合町大字高屋に所在する遺跡である。

真庭郡落合町は岡山県の中央部を南流する旭川の中流域に位置し、東は久米町、旭町、南は旭町、加茂川町、西は有漢町、北房町、北は勝山町、久世町に接し、約148km²の面積を有する。落合町の市街地は旭川右岸では上房郡北房町特部、中津井を水源とする流程約20kmの備中川が垂水地区で左岸では落合町上河内を水源とする流程約10kmの河内川が西原地区で合流しており、旭川中流域では最も広い沖積平野である。

こうした合流地に発達した落合町は現在真庭郡に属するが、これは明治33年3月に真嶋郡と大庭郡が合併してから呼ばれるようになったものであり、それまでは真嶋郡の一部であった。すなわち、和銅6年(713年)備前国の6郡を削って美作国を置いたが、この6郡とは英多、勝田、苫田、久米、大庭、真嶋であり、落合町はこの真嶋郡に属していたのである。古代真嶋郡は旭川の変遷で多少は変化したが、大体旭川の右岸が真嶋郡であったといわれている。そして『和名類聚抄』によれば真嶋郡は真嶋、垂水、鹿田、大井、栗原、美甘、健部、月田、井原、高田の10郷からなり、その範囲は現在の落合町、勝山町、湯原町、川上村、美甘村、新庄村が考えられ、美作国の西端部に位置していたのである。

落合町は真嶋、垂水、鹿田、大井、栗原の5郷からなり、今これを現在の地域に比定してみると備中川流域では上流から見れば、関が「大井郷」、栗原が「栗原郷」、鹿田が「鹿田郷」、垂水が「垂水郷」に、旭川流域では福田、高屋、日名などが「真嶋郷」に比定される。特に備中川流域は沖積段丘が発達し、縄文時代から安定した生活面がみられ、他の地域に比較して古代から多数の集落が在ったことが4郷の存在からも充分にうかがうことができ、また備中国と美作国との重要な交通路であったことが推察できる。一方、真嶋郷は『和名抄』によれば「古の郡家比に在り」と記載されていることから、郡衙の有力な比定地として今日まで伝えられてきた地域である。

福田A・B、高屋B散布地が所在する地区は真嶋郷に比定される地域であるが、現在まで古墳を中心に50以上の遺跡が周知されている。第1図は真嶋郷を中心にした弥生、古墳、歴史時代の遺跡を示したものである。この地域では弥生時代の遺跡から認められる。詳細は不明であるが丘陵尾根から斜面にかけて弥生中期中葉からの集落址が存在することが確認されている。古墳時代になると多数の古墳が築造され、数基単位の古墳群が形成されているがその大部分は後期古墳である。

前期古墳の分布は真嶋郡では垂水郷と真嶋郷に集中する。真嶋、大庭両郡で最大の前方後円墳である川東車塚(全長61m)を除くと備中川の左岸丘陵に前期の首長墓が多く認められる。

真嶋郷では現在のところ惣、富尾地区で数基認められるだけである。後期古墳の分布も圧倒的に真嶋郷と垂水に集中して存在し、他の郷とに歴然たる格差がある。特に幅が1km、長さ約2kmの東に開口する日名谷（真嶋郷）には37基の古墳が確認されており、既に破壊された古墳を加えれば50基程は存在したと思われる、真嶋郷では最も古墳が密集した地域である。古墳の内部主体は大部分が横穴式石室であり、6世紀中葉に築造され、7世紀中葉頃まで追葬された日名16号墳（注1）にみられるようにほとんどが後期古墳である。そして、神ノ毛1号墳、むすび山古墳は小型の前方後円墳で後円部に横穴式石室を持つことが判明している。（注2）このような前方後円墳の被葬者の性格はこの地域の在り方を知るうえで注目されるものである。

奈良時代に入ると現在の集落を重複して集落址がかなり形成されるようになる。特に開田、高屋、福田、且、中、富尾、惣などには須恵器が広範囲に散布している。真嶋郷衙は前述した如く真嶋郷に置かれたと伝えられている。条里制地割は中、富尾に良く遺存している。古代の道路は井原郷一月田郷—真嶋郷に至る道が日名谷の北側丘陵裾部を通過していた。この道はさらに旭川を渡り、戸坂峠を越えて河内に降り、追分を抜けて美作国府に至る重要な交通路であった。このように真嶋郷は美甘、健部、高田郷方面、井原、月田郷方面と大井、栗原、鹿田、垂水郷の三方面からの租税の集合場所でもあり、ここから美作国府に運ばれたものと考えられる。このことから、真嶋郷は古代においては重要な地域であった。

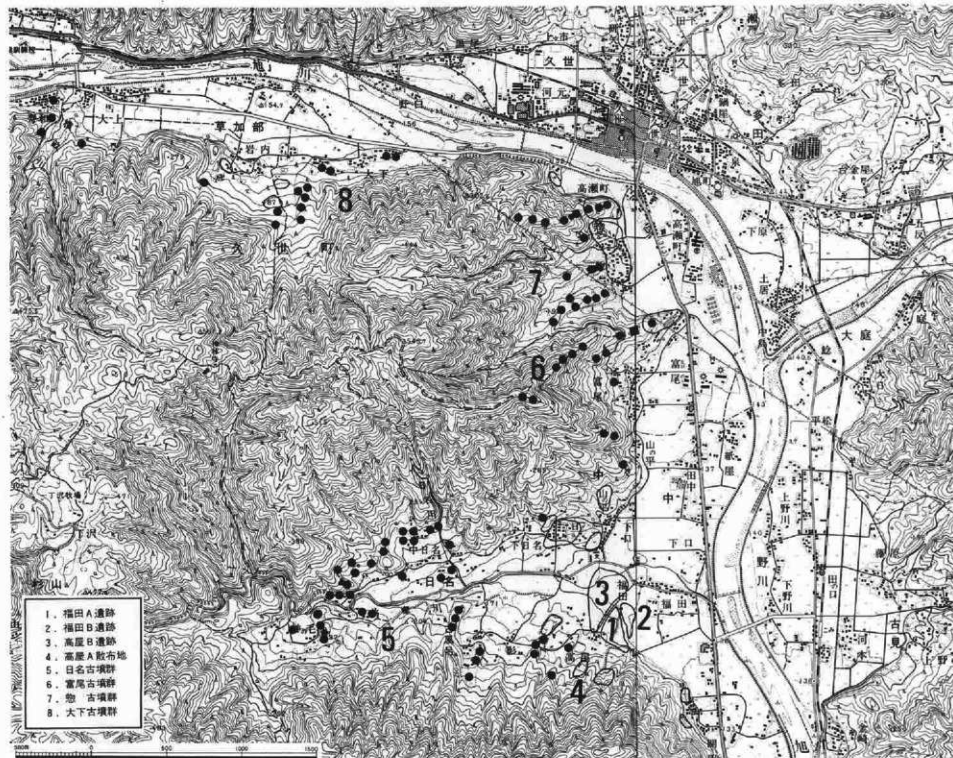
注

- 1) 昭和55年に園地整備事業のため記録保存のための発掘調査が実施された。報告書近刊予定。
- 2) 昭和44年に発掘調査が実施された。いずれも6世紀中葉に築造され、7世紀前半まで追葬が行われていたようである。報告書未刊。

第2章 調査の経緯

『続日本紀』に元明天皇和銅6年(713年)に備前6郡を割って美作国を始めて置くとの記載がみられる。この6郡とは英多、勝田、苫田、久米、大庭、真嶋であり落合町は古代においては真嶋郡に属する。そして『和名抄』によれば真嶋郡の郡衙は真嶋郷に在りと記載されていることから、永山卯三郎の『岡山県通史』(注1)や『落合町史』(注2)等では真嶋郷のどこであるかについて具体的に論議されることなく、「高屋」を比定地として今日に至っているのが現状であった。

近年、岡山県教育委員会が5ヶ年で県下各市町村の遺跡分布調査を実施した際に落合町でも詳細な分布調査が行われた。特に「日名谷」は以前から後期古墳を中心に37基が確認されており、既に破壊されたものを加えれば50基は存在したと思われる、その在り方が極めて特徴的であることから広く学界にも知られていた地域であったが、さらに弥生—歴史時代の遺物も広範囲に



第1図 周辺遺跡地図 (S=1/25000)

散布しており福田A・B、高屋A・B散布地が存在することが判明した。特に高屋A・B散布地には飛鳥～奈良時代の遺物が認められ、年代、文献とも合致することからますます真嶋郡衙を想定させる有力な遺跡となっていたのである。

昭和54年5月に落合町建設課から日名地区の団体営園場整備計画予定地内における日名11号、16号古墳の範囲確認依頼があったため、県教育委員会と町教育委員会が古墳範囲確認調査を実施した。調査終了後、園場整備計画担当との会議において、2基の古墳は現状で保存することで合意したが、その席上で初めて「日名谷」全体をⅢ期に分けて園場整備するという計画が明らかにされたのである。

町教育委員会では高屋地区が前述の如く真嶋郡衙の有力な比定地となっているため、早急に遺跡の種類、規模等を明らかにして保護、保存の対策を構ずる基礎資料を得る必要ができた。そのため、町教育委員会は県教育委員会文化課に遺跡の保護、保存についての指導を受けるとともに、確認調査の実施を依頼したのである。県教育委員会は昭和55年度に国庫補助を受けて発掘調査を実施したのである。調査の結果、福田A散布地では弥生時代の住居址、柱穴、土壌、掘立柱建物等を検出したが、遺跡の中心は弥生時代の遺構と考えられた。遺物は弥生時代中期から近世まで出土している。今回の調査で福田A散布地は弥生時代中期、後期の集落址であり、遺跡面積は約11,500㎡であることが確認できたのである。

高屋B散布地では奈良時代の土壌、時期不明の掘立柱建物、溝状遺構、柱穴多数が検出された。遺物は弥生時代後期～近世まで出土するが、その大部分は奈良時代の遺物であることから、奈良時代の遺構が中心であると思われる。しかしながら、官衙建物を想定させる遺構は確認できなかったのである。遺跡面積は別地点にも確認したため、約14,000㎡ある。

このような調査結果をもとに、園場整備関係者と保存協議を数回実施し、遺跡の保存に努めたが、地形上どうしても記録保存措置を講じなければならない地区が高屋B散布地で約4,600㎡、福田A散布地で約4,000㎡程できた。

協議の結果、次のような合意が成立した。

- (1) 調査面積が広大であり、調査体制が不十分なことから、2ヶ年に分割して調査を実施する。
- (2) 園場整備工程からみて、昭和56年度は高屋B散布地の調査を行う。
- (3) 発掘調査経費については、農林省と文化庁において了解されている「農業基盤整備事業等と埋蔵文化財の保護との関係の調整について」（昭和50年10月20日 庁保記第211号）のⅠの5項を適用するものとする。
- (4) 発掘調査は落合町教育委員会が事業主体者となること。

このような合意のもとに、昭和56年度は県教育庁文化課専門職員の調査指導を受けて実施した。昭和57年度については、県教育庁文化課から専門調査員を確保するよう指導をうけたため

調査員1名を確保して福田A散布地の調査を実施したのである。

発掘調査は岡山県教育庁文化課の指導、助言を得て、昭和56年、57年の2ヶ年間実施したが調査にあたっては農林水産省中国四国農政局、岡山県農林部農村整備課、岡山県真庭地方振興局、落合町役場、落合町文化財保護委員をはじめ地権者等関係各位には多大の御協力を得るとともに、地元有志の方々には作業員として協力を得た。記して感謝の意を表します。

注

1) 岡山県教育委員会「高屋B散布地、福田A・B散布地」岡山県歴史文化財発掘調査報告(45)1981年3月

調査日誌抄

高屋B遺跡

昭和56年

- 5月11日～5月16日 発掘機材の搬入。第3地点の表土排除。第1区の遺構検出。第2地点の表土排除。
- 5月18日～5月23日 第1地点の表土排除。第3地点1区柱穴の掘り下げ。
- 5月25日～5月30日 第3地点1区的全景写真撮影と実測作業及びレベリング作業。第2地点1区の遺構検出及び柱穴の掘り下げ。
- 6月1日～6月6日 第2地点1区的全景写真撮影と土壌断面実測。2区遺構の検出。第2地点1区の遺構平面図作成。土壌1の断面写真撮影、レベリング作業。断面の割りつけ。
- 6月7日～6月13日 第2地点2区柱穴、土壌の発掘。
- 6月15日～6月20日 第1地点1区の遺構検出。第2地点2区遺構の実測及びレベリング。土壌断面の写真撮影。第1地点1区トレンチ調査。第2地点2区の調査全て完了。
- 6月22日～7月4日 第1地点1区造成土

層の除去作業。

- 7月6日～7月11日 第1地点1区T-1、T-2の断面図作成。第1地点2区表土層の除去。造成土層、包含層の発掘。
- 7月13日～7月25日 第1地点2区遺構の検出及び柱穴の発掘。
- 7月27日～8月1日 第1地点2区トレンチ調査の実施。1号墳周縁の出土遺物写真撮影及び平面プランの実測。
- 8月3日～8月8日 第1地点2区レベリング作業。土壌墓の断面実測作業。1区2号墳周縁内の出土遺物写真撮影。
- 8月10日～8月15日 第1地点1区遺構清掃作業後全景写真撮影。第1地点1区遺構平面プランの実測、遺構のレベリング作業、2号墳周縁断面実測。
- 8月17日～8月22日 第1地点2区3号墳周縁の発掘及び断面写真撮影と実測作業。4号墳周縁の検出及び発掘、出土遺物の写真撮影及び全景写真撮影。
- 8月24日～9月5日 第3地点2区表土層除去作業。第1地点2区遺構の平面プラン実測及びレベリング作業、柱穴内の遺物のとり上げ完了する。

- 9月7日～9月19日 第3地点2a区遺構の発掘、遺構の清掃作業及び全景写真撮影。建物Ⅰ、Ⅱの写真撮影。2b区造成土層の除去。2a区遺構の平面プラン実測及びレベリング、断面の清掃及び写真撮影。
2b区表土層の除去作業。
- 9月21日～9月26日 第3地点2b区遺構検

- 出及び発掘作業。
- 9月28日～10月3日 第3地点2b区遺構の清掃及び全景写真撮影。平面プランの実測及びレベリング。
- 10月5日～10月9日 ベルトコンベヤー、ヤグラなどの撤去作業。

福田A遺跡

昭和57年

- 4月12日～4月17日 現場にプレハブ建設、機材搬入、重機による表土剥ぎ開始。
- 4月19日～4月24日 1区表土層排除作業。
- 4月26日～5月8日 1区遺構検出。建物址2棟検出。
- 5月10日～5月15日 1区柱穴の断面実測及び写真撮影。2区表土層除去作業。1区2区清掃後全景写真撮影、平板実測、遺物実測。
- 5月17日～5月22日 1区レベリング。1号住居址のセクション及び全体清掃。ピットの追加平板、断面写真及び実測。
- 5月24日～5月29日 2区遺構検出。柱穴及び溝堀り。土坑内土器出土状況写真撮影。
- 5月31日～6月5日 7区表土層除去。2区平板実測及び写真撮影。
- 6月7日～6月12日 2区1号住居址を堀り、レベリング、清掃後写真撮影。
- 6月14日～6月19日 7区遺構検出。
- 6月21日～6月26日 7区清掃後写真撮影、平板実測、レベリング。7-2区表土層除去。

- 6月28日～7月3日 7区暗茶褐色土の掘り下げ。7-2区遺構検出。
- 7月5日～7月10日 7-2区の1号住居址断面図作成。
- 7月12日～7月17日 6区表土層除去。
- 7月19日～7月24日 7-2区清掃及び写真撮影、平板測量及び平板実測。
- 7月26日～7月31日 7-2区レベリング。6-2区表土層除去及び遺構検出。
- 8月2日～8月7日 6区暗茶褐色土層の掘り下げ。焼土、井戸の平面実測。6-2区竈状遺構掘り、断面実測。井戸状遺構の断面図作成。6区暗茶褐色土除去。
- 8月9日～8月14日 6区遺構検出。
- 8月17日～8月21日 5区、3区の表土層剥ぎ。
- 8月23日～8月28日 6区清掃後写真撮影、平板実測及び6区1号住居址実測。
- 8月30日～9月4日 6区レベリング。5区遺構検出。4区表土層除去。5区土坑断面実測。
- 9月6日～9月11日 5区遺構掘り、土坑断面実測及び全景写真撮影。4区表土層

除去、遺構検出。

9月13日～10月2日 4区遺構掘り、全景写真。5区プラン実測及びレベルリング、平板実測。3区表土層除去。

10月4日～10月9日 4区平板実測、レベルリング及び土壌実測。5区火葬墓断面実測。3区暗青灰色粘土の掘り下げ。

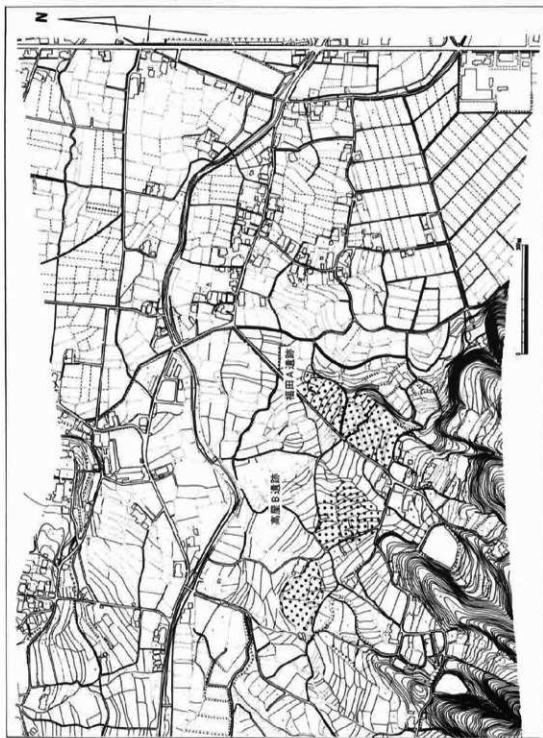
10月11日～10月16日 3区暗青灰色粘土の

掘り下げ。4区土壌4の木板取り上げ後底部の実測。6区H-1炭化物を排除し、その下のピット検出。5区火葬墓立ち割り後、焼土を取りその下の石組を検出する。6区H-1写真撮影。

10月18日～10月23日 3区清掃及び全景写真撮影、平板実測及びレベルリング。6-2区竈状遺構実測。発掘機材の搬出し、全ての作業終了。



第2図 圃場整備後の福田A・高屋B遺跡周辺地形図 (S=1/4000)



第3圖 伊豆A、Iwata B邊部周辺地形圖

福田 A 遺跡

目 次

第3章	福田A遺跡	15
第1節	第1調査区の調査概要	16
第2節	第2調査区の調査概要	21
第3節	第3調査区の調査概要	25
第4節	第4調査区の調査概要	27
第5節	第5調査区の調査概要	29
第6節	第6調査区の調査概要	40
第7節	第7調査区の調査概要	45
第8節	その他の出土遺物	50
第9節	ま と め	55

図 目 次

第4図	福田A遺跡調査区位置図 (S = 1/2000)	15
第5図	第1調査区遺構全体図 (S = 1/400)	17
第6図	1区住居址1, 住居址2平・断面図 (S = 1/80)	18
第7図	1区建物I, 建物II平・断面図 (S = 1/80)	19
第8図	1区出土遺物 (S = 1/4)	20
第9図	第2調査区遺構全体図 (S = 1/300)	21
第10図	2区住居址1平・断面図 (S = 1/80) 出土遺物 (S = 1/4)	22
第11図	2区土壇33平・断面図 (S = 1/30)	23
第12図	2区土壇33出土遺物 (S = 1/4)	23
第13図	2区出土遺物 (S = 1/4)	24
第14図	第3調査区全体図 (S = 1/200)	26
第15図	3区出土遺物 (S = 1/4)	26
第16図	第4調査区遺構全体図 (S = 1/200)	27
第17図	4区土壇4, 5, 6平・面図 (S = 1/30), 土壇2出土遺物 (S = 1/2)	28
第18図	第5調査区遺構全体図	29
第19図	5区溝1平・断面図 (S = 1/30)	30
第20図	5区溝1出土遺物 (S = 1/4)	30
第21図	5区土壇墓平・断面図 (火葬墓1~6) (S = 1/30)	33

第22図	5区土壌墓平・断面図(火葬墓7~14)($S = 1/30$)	34
第23図	5区土壌墓平・断面図(土壌1~7)($S = 1/30$)	35
第24図	5区土壌墓平・断面図(土壌8~15)($S = 1/30$)	36
第25図	5区土壌墓平・断面図(土壌16~24)($S = 1/30$)	37
第26図	5区土壌墓出土遺物, 土器($S = 1/4$), 釘($S = 1/2$), 銅銭拓本(実物大)	38
第27図	第6調査区遺構全体図($S = 1/300$)	40
第28図	6区住居址1平・断面図($S = 1/80$), 出土遺物($S = 1/4$)	41
第29図	6区土器溜平・断面図($S = 1/30$), 出土遺物($S = 1/4$)	42
第30図	6区建物I平・断面図($S = 1/80$)	43
第31図	6区カマド平・断面図($S = 1/30$)	43
第32図	6区出土遺物($S = 1/4$)	44
第33図	第7-1調査区遺構全体図($S = 1/400$)	45
第34図	第7-2調査区遺構全体図($S = 1/300$)	46
第35図	7区住居址1平・断面図($S = 1/80$), 出土遺物土器($S = 1/4$), 鉄器($S = 1/2$)	47
第36図	7区住居址2平・断面図($S = 1/80$), 出土遺物($S = 1/4$)	48
第37図	7区住居址3平・断面図($S = 1/80$)	49
第38図	7区焼土墳平・断面図($S = 1/30$)	49
第39図	7区出土遺物($S = 1/4$)	51
第40図	その他の出土遺物, 石器1~14($S = 1/2$)	52
第41図	その他の出土遺物, 石器15~20($S = 1/2$)	53
第42図	その他の出土遺物, 石器21, 22($S = 1/2$)	54

表 目 次

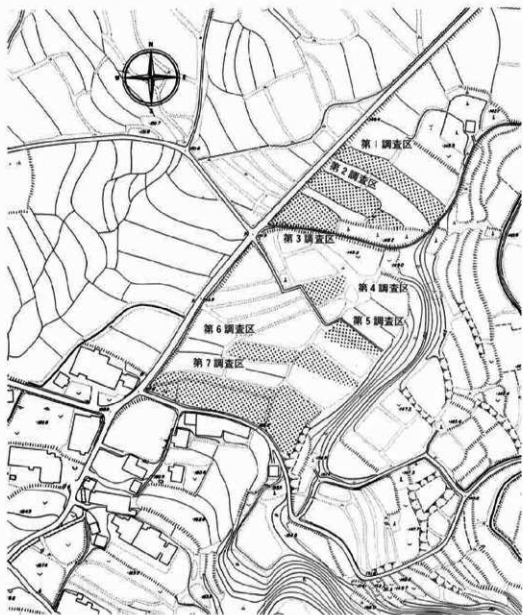
表 1	第4調査区出土土壌墓一覽表	28
表 2	第5調査区出土土壌墓一覽表	32
表 3	第5調査区土壌内出土土器一覽表	39

図 版 目 次

図版 1(1)	福田A遺跡全景(西から)
(2)	第1調査区全景(西から)
(3)	第1調査区 住居 1(東から)
図版 2(1)	第2調査区全景(西から)

- (2) 第2調査区 住居址1 (南から)
- (3) 第2調査区 土壌33 (南から)
- 図版3(1) 第4調査区全景 (東から)
- (2) 第4調査区 土壌4
- (3) 第4調査区 土壌5
- 図版4(1) 第5調査区全景 (西から)
- (2) 第5調査区全景 (東から)
- (3) 第5調査区 土壌15
- 図版5(1) 第5調査区 土壌10, 土壌11
- (2) 第5調査区 火葬墓3
- (3) 第5調査区 火葬墓3 (焼土除去後)
- 図版6(1) 第6調査区 (西半分) 全景 (東から)
- (2) 第6調査区 (東半分) 全景 (西から)
- (3) 第6調査区 住居址1 (東から)
- 図版7(1) 第6調査区 カマド
- (2) 第7(1)調査区全景 (西から)
- (3) 第7(2)調査区全景 (比から)
- 図版8(1) 第7調査区 住居址1 (北から)
- (2) 第7調査区 住居址2 (北東から)
- (3) 遺跡見学会風景
- 図版9 出土遺物 (土器)
- 図版10 出土遺物 (土器, 鉄器, 石器, 銅銭)

第3章 福田A遺跡



第4図 福田A遺跡調査区位置図 (S=1/2000)

遺跡は真庭郡落合町大字高屋に所在する。中国山地に発源し瀬戸内海に注ぐ旭川は真庭郡久世町、落合町で流れを東から南に大きく変える所であり、近世まで河道がたびたび変わると同時に旭川中流域で最も大きな沖積平野が形成された所でもある。福田A遺跡はこの旭川の右岸にある一支流の当摩川に沿って入る幅約1km、長さ約2kmの通称「日名谷」の入口部の南斜面に所在する。

遺跡は深山(526m)から東へ伸びる山塊の東端低丘陵にあり、前面には扇状地、東には広大な沖積平野が形成されている。

福田A遺跡は高屋集落へ上る町道より東の丘陵全体、約20,000㎡の範囲に存在することが周知の遺跡として遺跡台帳に記載されていた。今回の発掘調査に先立って昭和55年に実施した確認調査の結果(注1)は丘陵尾根部全域に弥生時代中期中葉～江戸時代の遺構が重複して存在するという事であった。今回の発掘調査は圃場整備の計画範囲内でしかも工事により切土となる部分のみについて実施した。盛土となる部分については水田下に現状保存されるということで発掘調査は実施しなかった。従って調査区は部分的に分散した状態であった。

調査区は北から順次1～7区とし、表土層は基本的に包含層の上面までを重機により排土した。発掘調査は1→2→7→6→5→4→3区の順に実施した。調査期間は昭和57年4月15日に着手し、10月23日に終了した。

発掘調査は工事により切土となる部分を7区画に分けて実施した。その結果、遺構が検出されなかったのは3区だけであった。しかし遺構は丘陵の尾根部分を中心に存在している為耕地の造成時に削平されており遺構の残存状態はどれもよくない。検出された遺構は弥生時代中期中葉～古墳時代後期に至る竪穴住居址7軒、古墳時代後期の建物2棟、室町時代～江戸時代の土壇墓39基と火葬墓14基、江戸時代の井戸、竈、溝などである。弥生時代の竪穴住居址は丘陵上方の6、7区から、古墳時代の竪穴住居址、建物は1,2,7区から、室町時代～江戸時代の遺構は丘陵中部の4,5,6区から検出された。また、1,2,6区の西半と7区の北半に堆積する暗茶褐色土層内には弥生時代中期中葉～古墳時代後期に至る遺物を多数包含しており、埋土部分にもこの時期の遺構が存在することは十分に考えられる。4,5区と6区の東半には暗茶褐色土の堆積はみられず、表土層の下は地山となる。従って弥生～古墳時代の遺構は主に暗茶褐色土の堆積する範囲に存在する。また遺構は認められなかったが3区の暗青灰色粘質土には主に奈良時代の須恵器を多数包含していた。

注(1) 岡山県教育委員会「高屋B散布地、福田A・B散布地」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告49(1981年3月)

第1節 第1調査区の概要

1区は調査区が一番北の丘陵裾部に位置する。調査区は60m×11mの細長い範囲で約660㎡の広さである。旧地形は、住居址1から住居址2にあたりにかけてが谷部となっており地山で

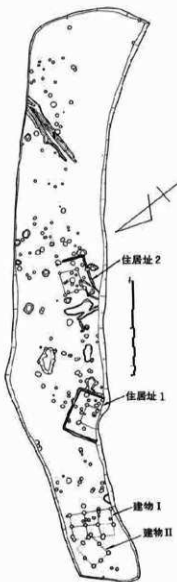
ある黄茶褐色土の上に暗茶褐色土が堆積していた。暗茶褐色土中には弥生時代中期中葉から古墳時代にかけての遺物を包含していた。また、他からの流入と思われるが、縄文式土器や縄文時代の石鏝も出土した。暗茶褐色土の下層からは住居址2軒と多数の柱穴が検出された。谷部から西は地山土の上に小石を多量に含む灰色土が薄く堆積しており、古墳時代後期と奈良時代の須恵器、土師器を含んでいた。包含層の下からは地山を切り込んで建物が2棟と、多数の柱

穴が検出された。谷部から東は耕作土の直下が地山となっており、溝1本と柱穴群が検出されたが、近世以降の新しいものばかりである。

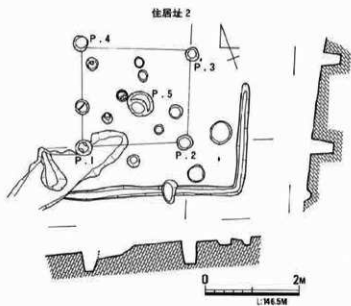
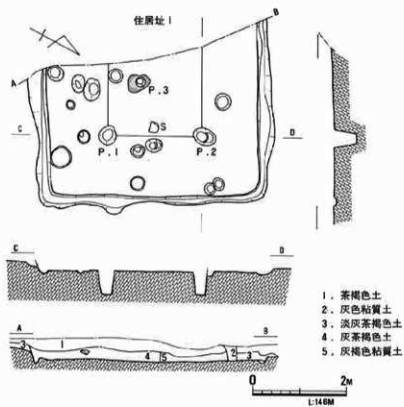
住居址1 (第5図 図版1)

調査区の北西約 $\frac{1}{3}$ のところに検出された隅丸方形の竪穴住居址である。全形の約 $\frac{1}{3}$ が調査区内に位置していた。住居址1の位置は最も暗茶褐色土の厚く堆積する部分であり、その堆積状況は第6図A-B断面の如くである。住居址の規模は1辺約5mを測り、4本柱と想定されるが、検出したのは柱穴2本と中央ビットである。中央ビットは周囲50cm×35cmの範囲で楕円形状に赤橙色～暗赤色に熱変していた。中央ビット内には灰を主とする暗黒褐色の土が入っていた。P-1とP-2のはば中間の位置には、18cm×20cm、厚さ9cmを測り上面の平坦な石が床面に置かれた状態で検出された。平坦面には使用痕が認められる。

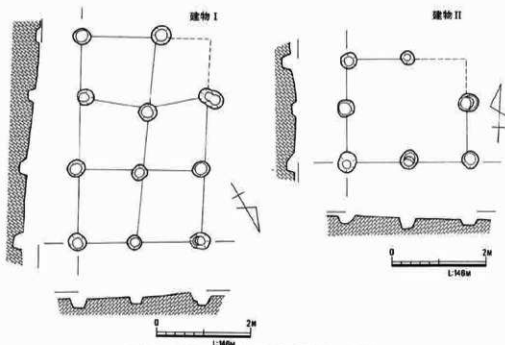
遺物 (第8図 1) 遺構の残存状態が良くなかったため、出土遺物は小片ばかりで、図示できたのは須恵器の杯蓋1点だけである。図示できなかったが他に杯の高台部分の一部と思われる小片も出土していることから、住居址1の時期は古墳時代末期～奈良時代と考えられる。



第5図 1区遺構全体図 (S=1/400)



第6図 Ⅰ区住居址1・2平・断面図 (S=1/80)



第7図 Ⅰ区建物Ⅰ・Ⅱ平・断面図 (S=1/80)

住居址2 (第6図)

調査区のはば中央部から検出された隅丸方形の竪穴住居址である。住居址2もかなり削平された状態で検出された。暗茶褐色土は北西に向って傾斜しており、壁体溝は南東部分が約2/5周残存しているだけである。主柱は4本で他に中央ビットが存在する。中央ビットは住居址1同様周囲が焼土化していた。規模は壁体溝の一部しか残存しないが1辺約4.5mと推定される。出土遺物は住居址に伴うと思われるものは土師器の小破片しか出土してなく時期は判断し難い。

建物1 (第7図, 図版1)

調査区の北西端に位置し、建物2と切り合って検出された。2間×3間の建物で中に2本の添柱を持つ。主軸は北東-南西方向である。建物1が検出されたところは耕作土の下に一層薄く黄褐色土が堆積していたのみで、上層部分は削平を受けている。南西端の一本はレベルからみて削り取られたとは思われないが検出できなかった。柱穴の心々間は130cm~170cm, 柱穴の大きさは直径35cm~40cmを測る。遺構に伴う出土遺物はないが、上層からは8世紀前半の須恵器が多数出土している。

建物2 (第8図, 図版1)

建物1の西隅りに切り合って検出された、2間×2間の建物である。北東方向に向って多少傾斜しているためか北東隅の柱穴の1本は検出できなかった。主軸方向はほぼ東西南北に添っており、建物1とは異なる。柱穴の心々間は100cm~130cmを測り、柱穴の規模は直径30cm~45cmである。



第8図 1区出土遺物 (S=1/4)

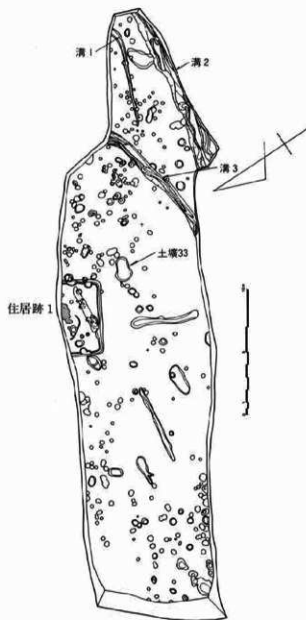
遺物 (第8図, 2, 3) ビット6から須恵器の小片10数点出土しているがいずれも小片で図示したのは2点のみである。3は杯身2は甕の口縁部分である。どちらも小破片のため断定はできないが、して言えば古墳時代末~奈良時代にかけての時期と思われる。

1区出土遺物 (第8図4~15, 図版9)

暗茶褐色土と灰褐色土から出土したものである。4は縄文式土器で、器形は不明であるが、外面には斜方向に押型文が施され、一段内側にくびれる部分からは縄文が施されている。内面には植物質の繊維痕が見られる。5~9は弥生式土器である。5は壺型土器、6~8は甕型土

器でくの字に折れ曲る口縁をもつ。弥生式土器はどれもその特徴から弥生中期中葉の時期を与えることができる。10-13は須恵器である。全て杯蓋で、それらの時期は6世紀中葉から8世紀代の時期を与えることができる。14, 15は土師器である。14は甕, 15は丸底の小型壺である。

図示したものの以外にも1区からは整理箱に約3箱の遺物が出土している。それらは灰褐色土と暗茶褐色土からの出土で、その大部分は6世紀中頃-8世紀にかけての須恵器である。



第9図 2区遺構全体図 (S = 1/300)

第2節 第2調査区

2区は水田1枚隔てて1区の南上方にあり、東西に細長い調査区で約460㎡である。土層の堆積状態は1区と同じで地山である黄茶褐色土の上に暗茶褐色土が堆積しており、2区では調査区全域に及んでいた。暗茶褐色土中には弥生時代中期、後期の土器、古墳時代末-奈良時代の須恵器、土師器、石庖丁、石槍、サヌカイト、黒曜石の剥片が含まれている。遺構は暗茶褐色土から掘り込まれているが、暗茶褐色土で検出できるものと、地山近くまで掘り下げないと確認できないものがある。特に暗茶褐色土は住居址1付近を中心に北に向うにつれてすり鉢状に深くなっており、住居址1付近では上下2層にわたって遺構を確認した。

検出した遺構は古墳時代の住居址1軒、弥生時代の溝1、中世-近世の溝2本、奈良時代の土土壇墓1、柱穴等である。

住居址1 (第10図, 図版2)

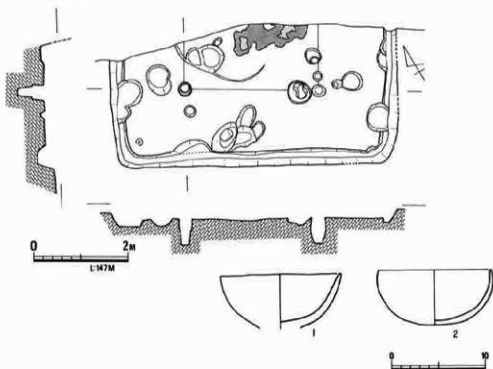
調査区のほぼ中央部の北端に位置し、全形の約 $\frac{1}{2}$ が調査区内から検出された。ここは暗茶褐色土の最も厚く堆積すると

ここでその上面では確認できず、地山近くまで掘り下げてプランを確認した。住居址1は隅丸方形の竪穴住居址で1辺6.4mをはかる。主柱は4本と考えられるがそのうち調査区内からは2本を検出した。中央ピットは検出できなかったが、住居址床面の主柱で囲まれる部分は周囲より一段低くなり、その中心部分は160cm×45cmの範囲で焼土化していた。焼土面は強い熱で床面をしっかりと焼いた状態である。

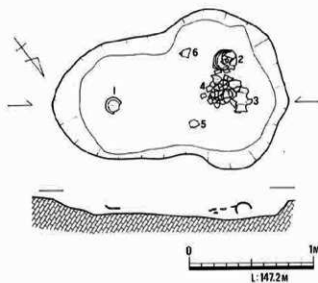
遺物 (第10図、図版9) 出土遺物は床面の西隅コーナー付近から1が出土し、壁体溝内から2が出土した。1は高杯型土器で脚部は欠損している。2は椀型土器である。他に図示不可能な小破片も出土しているが、器形の判別できるものはない。従って住居址の時期は判断し難いが、出土遺物が5世紀代の土師器と考えられることから、住居址もその時期と考える。

土墳33 (第11図、図版2)

住居址1の南約1.8mのところに位置する。平面型は歪つな瓢形を呈し、長さ1.9m、幅0.96~1.25m、深さ0.14mを測る。長軸は北西-南東方向である。土墳は上半の大部分を既に削平されていて浅く土墳上面の包含層を除去した段階では遺物の一部はすでに露呈していた。堆積土も暗茶灰褐色土1層のみであった。遺物は1点を除いて北西側半分にはば集中した状態で出土した。各遺物の出土地点は遺構図の番号のとおりである。出土遺物は土圧によって押しつぶされた状態であった。



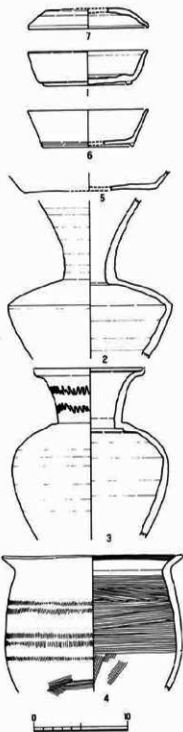
第10図 2区住居址1平・断面図 (S=1/80) 出土遺物 (S=1/4)



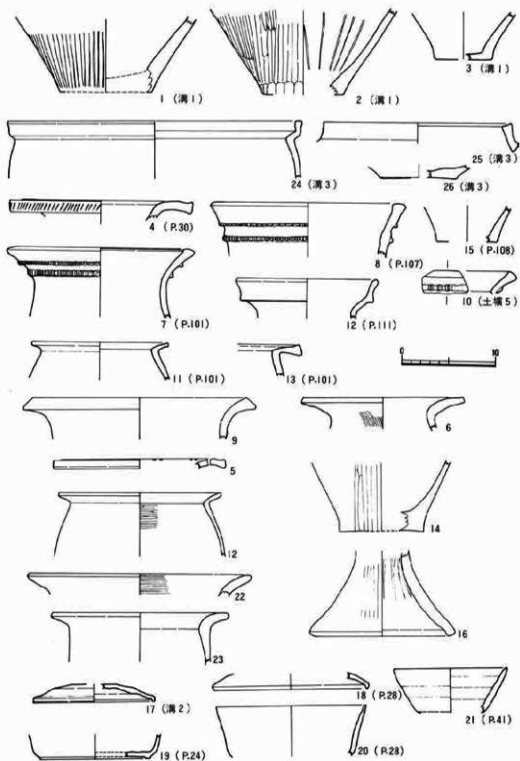
第11図 2区土壇33平・断面図 (S=1/4)

遺物 (第12図, 図版9) 4以外は全て須恵器である。7は杯蓋である。すでにかえり
は削失しているが、天井部は丸味を持っている。
1, 6は杯である。高台は底部とほぼ直角に貼
付されており、体部も直線的でふくらみは見ら
れない。5は盤である。2は長頸壺で、肩部と
体部の境は明瞭な稜線で面される。3は短頸壺
である。口縁端部をわずかに欠くが、ラッパ状に
開いたのち屈曲して上方を向いておさめる。頸
部にはへら先による波状文が廻らされている。
4は土師器の甕である。くの字に外反する口縁
を有し、体部はあまり張らず、倒卵形を呈す。
全体にハケ目を施した後、外面だけは軽く横ナ
デによる仕上げ調整を行っている。

これらの遺物の時期はその特徴から奈良時代
中頃と考えられる。



第12図 土壇33出土遺物 (S=1/4)



第13图 2区出土遗物 (S = 1/4)

2区出土遺物 (第13図)

ここに図示した遺物はその他の遺構、暗茶褐色土から出土したものである。包含層からは図示した以外にも整理箱に4箱余り出土しているが、小破片が多く、ここに載せたのはそのうちの極一部である。1～16は弥生式土器である。4～10は壺形土器である。11～13は甕形土器でくの字に折れ曲る口縁を有する。16は高杯形土器の脚部である。17～21は須恵器である。杯蓋(18, 18)はすでに内面のかえりが削失し、口縁端部がS字状に屈曲する傾向にある。杯身は高台を有するもので体部はあまり丸味を持たない。22, 23は土師器、24～26は平安以降の土器である。

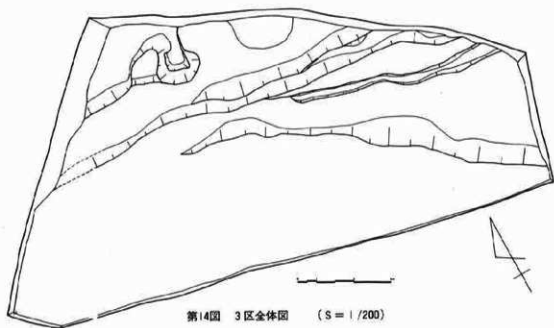
以上2区出土の土器はだいたい3時期に分けられる。弥生式土器は中期中葉を中心とする時期、須恵器は8世期中葉から末にかけての時期と考える。

第3節 第3調査区

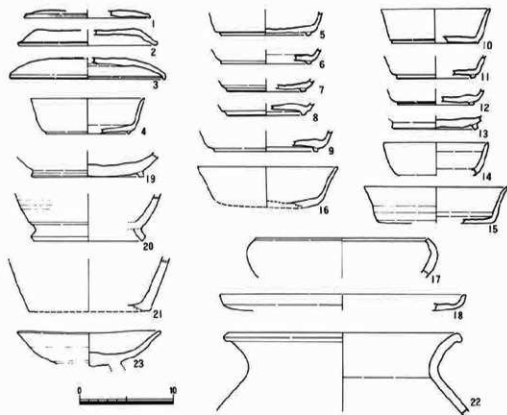
3区は2区の水田1枚隔てた上方に位置する。3区の南半は表土層の下がすぐ地山になっており、遺物の出土はほとんどなく、遺構も全く検出されなかった。付近の人の話では南側の道をつくる時にかなり削り取ったということである。北半は調査区の北側に向って階段状に下っており、河原石を多量に含む青灰褐色土層や砂層が何層かにわたって堆積し、調査区の北コーナーの底部には暗青灰色粘土が厚く認められた。その状況からこの落ち込みは水が流れていた様子を示す。流れの方向は西から東で、その流れは2区の溝2に続くと考えられる。2区の溝2にも河原石を多量に含んでおり人工の溝というよりむしろ自然の流路に近いものである。溝2からは須恵器の杯蓋の破片が出土しているが、3区出土のものとはほぼ同時期である。

3区出土遺物 (第15図、図版9)

全て暗青灰色粘土層からの出土である。1～21は須恵器、22, 23は土師器である。内訳は1～3は杯蓋で天井部に丸味の残るものと偏平なものとがあるが、いずれも蓋のかえりはみられない。4～16は杯身である。高台の付くものと付かないものがあるが、大部分は高台が付く。高台は底部に対してはほぼ直角についている。体部はほぼ直線的にたち上っており、丸味は見られない。17は鉢の口縁部である。18は盤である。図示できなかったが、同一破片と思われるものに脚部の接合痕部分が見られることから台付盤と考えられる。19～21は壺類の底部である。22は甕である。23は土師器の杯身で精製された良質の土を用いている。内面にはススの付着痕が認められる。



第14图 3区全体图 (S = 1/200)



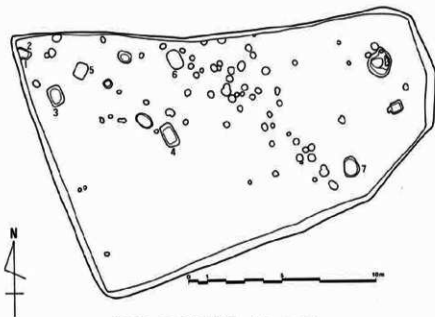
第15图 3区出土遗物 (S = 1/4)

第4節 第4調査区

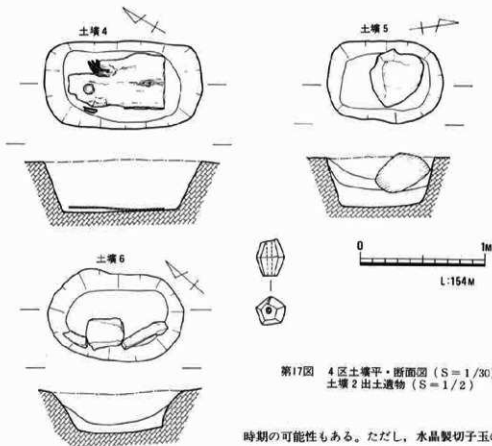
第4区は本遺跡の所在する丘陵のほぼ中位に位置し、12m×21m余りの狭い範囲である。調査区の南東側は隣の畑より約1.5m低くなっており、堆積土は認められず耕作土の直下に地山面が検出された。北東端の谷部分は50cm余の造成土が堆積していたが、拳大の小石を多数含む灰褐色土で、遺物はほとんど含んでいなかった。遺構は地山面を切り込んでいるが、畑を造成する際にかなり削平されたらしく、遺構はどれも浅い。検出した遺構は土壌墓7基と柱穴であるが、その配置は中央に集中し尾根側の南西端と谷側の北東端からはほとんど検出されなかった。当調査区からの出土遺物は極めて少なく、後世の流入と考えられるかなり磨滅した弥生式土器片や土師器片が出土している。いづれも小破片のため実測不可能である。

土壌墓 (第17図、図版3)

それぞれの計測値は表1に示したとおりである。土壌墓1と土壌墓2は切り合っており、その新旧関係は1の方が新しい。土壌墓は穴を掘っただけのものと石を載せていたものとの2種類が認められる。中でも土壌墓4は棺の底板と思われる薄い一枚板が底部に残存していた。その板の上には塗物の柄らしきものが1点置かれていたが、木質部分は腐蝕しており形状は不明。土壌墓3では銅銭が5枚底部から出土した。銅銭は文字を鋳いた面を中側に向けて密着しているため種類は不明である。土壌墓の時期についてはそれを決定しうる有力な伴遺物はない。しかし、畑1枚隔てた5区から類似の土壌が多数検出されており、両区のものほぼ同



第16図 4区遺構全体図 (S=1/200)



第17図 4区土墳平・断面図 (S=1/30)
土墳2出土遺物 (S=1/2)

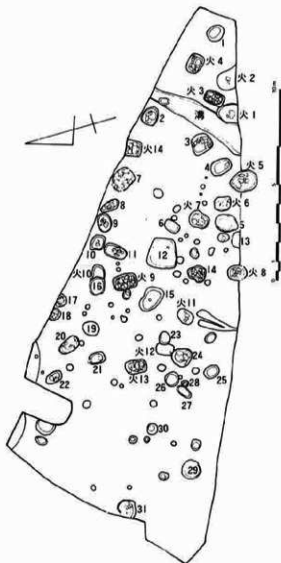
時期の可能性もある。ただし、水晶製切子玉の出土した土墳墓2と棺板の残る土墳墓4はやや時期が異なる可能性も考えられる。土墳墓2の場合は土墳墓1よりも古いことと切子玉の出土ということがその理由であるが、切子玉は後世の流入ということも十分考えられるので時期については明確にし難い。土墳墓4は棺板が腐蝕せずに残ったという点について、やや新しい時期を想定するのであるが、時期を明瞭に示す供伴遺物がないため、これについても断定には至らない。

表1 第4調査区土墳墓出土一覧表

					単位 cm	
名称	形状	長さ	巾	深さ	出土遺物	長軸方向
土墳墓1	隅丸方形		54	10		北東—南西
2	"	82	48	11	水晶製切子玉	北西—南東
3	"	107	79	16.5	銅銭5枚(不明)裏は素文	北西—南々東
4	"	125	70	41	底板, 塗り物(椀?)	北々西—南々東
5	"	92	67	40		北々東—南々西
6	楕円	107	69	30		北々西—南々東
7	"	102	74	18.5		北—南

第5節 第5調査区

5区は水田1枚隔てて4区の南東上方に位置し、丘陵の尾根筋にあたる。調査範囲は約200㎡弱の広さの中に多数の土壌墓が検出された。堆積土は尾根筋に当たる部分はほとんどなく、南東端～北西端にかけてはやや厚く灰黄褐色土が堆積するが、厚い部分でも30cm程度で大部分の遺構は地山直下から検出された。検出された遺構は土壌墓42、溝1、柱穴多数であり、調査区全域にまんべんなく広がった状態で検出された。



第18図 5区遺構全体図 (S=1/200)

溝1 (第19図)

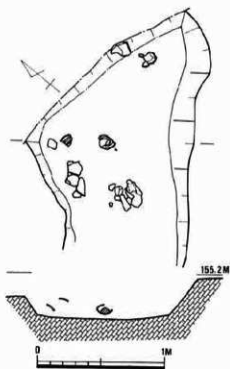
調査区の南東端近くに調査区をちょうど真横に横断するような状態で検出された。溝は長さ5.6m、巾1.3m、深さ0.22mを測るが両端は調査区域外にあたるため全長ではない。溝の中には暗茶灰色を呈するボロボロの土が入っていた。遺物は南端からまとも出土した。いずれも底部近くから出土したが小破片に砕けていた。

遺物 (第20図、図版9) 壺形土器、甕形土器、水指形土器が出土している。壺形土器の口縁は外方に大きく湾曲する形状を示し、口縁から頸部にかけて凹線文が施される。台付壺は台部に凹線文と貫通されていないが三角形透しを施し、その間をハケ目で調整している。水指形土器は全体をハケ目調整の後上から凹線文、波状沈線文、ヘラ先による斜行沈線文と装飾性豊かである。甕形土器はくの字に屈曲する口縁を有するが、端部はいくらか上下に肥厚されている。時期は弥生時代中期と思われる。

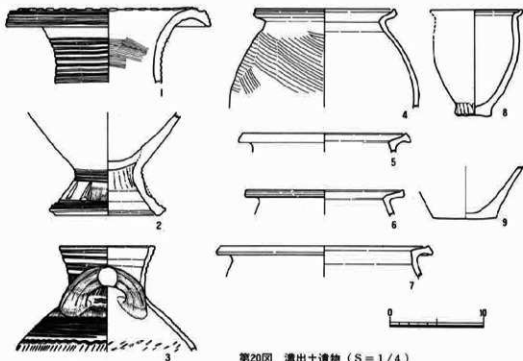
土墳墓（第21～25図、図版4、5）

当調査区は約200㎡弱の広さであり、土墳墓はこの範囲から42基検出された。そのうち切り合っているものは1基だけで、そのほとんどは稠密な分布を示し、ある時期における墓地であった状況を呈している。その範囲は、水田1枚隔て下の第4区からも7基の土墳墓が検出されていることから、第4区の範囲まで広がるとされる。しかし、上方の第6区からは全く検出されてなく、その範囲は5区を中心に西へ4区のあたりまでと考えられる。

それぞれの土墳墓については計測値を表2に示した。まず、これらを形態別に見ていくと、3つのタイプに分けられる。各々A、B、Cタイプと分けると、AタイプはNo.1、6、12、15のように楕円形又は隅丸長方形に穴を掘っただけのもの。BタイプはNo.2、7、14、20等のように穴を



第19図 5区溝平・断面図 (S=1/30)



第20図 溝出土遺物 (S=1/4)

掘って埋葬後拳大から人頭大の石を載せたものである。中に入っている石は河原石や周辺の山石が使用されており、数も1個だけのものから10数個のものまでである。これらの石は出土状況から埋土と一緒に入れられたものではなく、埋葬後棺の上に置かれたものが、棺の腐蝕によって土壌内に埋没したと考えられる。それを示す例としてNa20の場合出土した土師皿2枚は石の下からであった。CタイプはNo火-1~14のように火葬にしたものである。Cタイプの中にはNo火-1, 10, 12のように内面が焼土化しただけのものと、No火-3等のように底に石を並べてあるものとに分かれる。並べられた石は主に10~20cm大のものが使用されており、どれも熱を受けていた。石の上面及び石と石の間隙には粉化、細片化した木炭片が入り、石はカーボンベッドの中に挟まれたような状態である。そしてその石の上面には赤色又は赤褐色に熱変した熱土がかぶさっていた。上面の焼土はNo火-8のように剝離しているものもあるが大部分はNo火-3, 9のように1~10cmの厚さに堆積した状態で検出された。そして、石と焼土の間には熱を受けて細かく砕けた骨片が多数入っていた。また一緒に出土した土師器皿は焼土中に半分埋った状態のもの（No火-3）、焼土中に埋っていたもの（No火-6）、などが認められた。以上の状況でこれらの焼けた土壌は明らかに火葬を目的としたものである。しかし、これだけ丁寧な作りに関わらず使用回数はどれも1回だけである。

A-Cタイプの要略は以上であり、これらの内部施設は木棺が中心になっていたと考えられる。確実に痕跡が残っていたものはないが、Na12のように木質痕の付着した鉄釘の出土した土壌もある。調査区は異なるが4区の土壌4のように底板の残るものもある。棺の形態は土壌のプランが円形-楕円形もしくは隅丸長方形が主流であり、且つ長辺の最大長は1.6mのものがあるが平均で長辺100.5cm短辺81.7cmであることから座棺であったと考えられる。但し、土壌のプランから考えて棺はいわゆる棺桶と、方形もしくは長方形の箱型であったと思われる。

これらの土壌からの出土遺物は土師皿、銅銭などであるが埋葬時に棺の中に収められていたもので、遺物の入っていた土壌は20基をかぞえ全体の約半数であった。

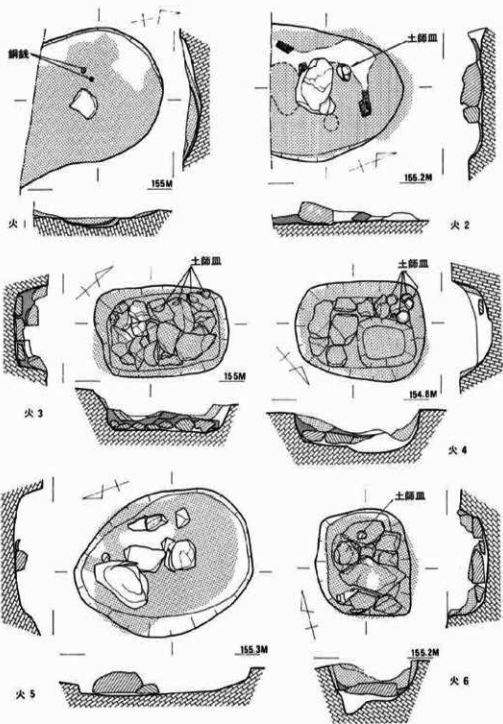
遺物（第26図、図版9, 10）

出土遺物は、土師皿、陶器碗、銅銭、鉄釘などである。土師皿はある程度規格性を持っており口径は7.6~8.5cmのもの、9.4~10.0cmのもの、12~15cmのもの3種に分かれる。形状は口径の大小に関らず底部から体部にそのままのカーブで続くもの（No1, 7, 10, 13, 14, 16, 21）と体部がやや外湾するものとに分かれる。これらの土師皿の中にはススの付着痕の認められるもの（1, 27）もいくつかあり、日常雑器が埋葬されたものであろう。陶器碗はNa12, 15土壌から1枚ずつ出土しているが、同一席で製作されたものらしく二つである。器壁が厚く、全体に鈍い感じを与える器形である。胎土は淡灰黄褐色を呈し砂粒をほとんど含まない精製された土を用いている。内面全体と外面上半部に淡緑色の釉がかかっているが、釉は所々に剝離

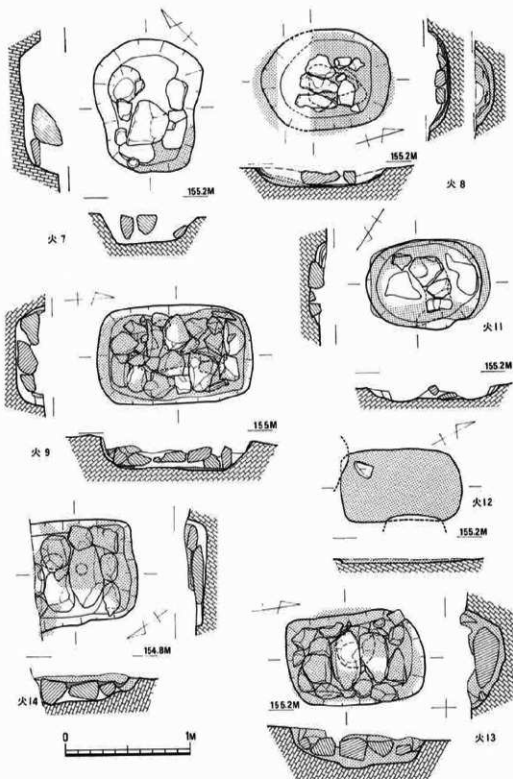
表2 第5調査区出土 土城墓一覧表

() は残存長 単位 cm

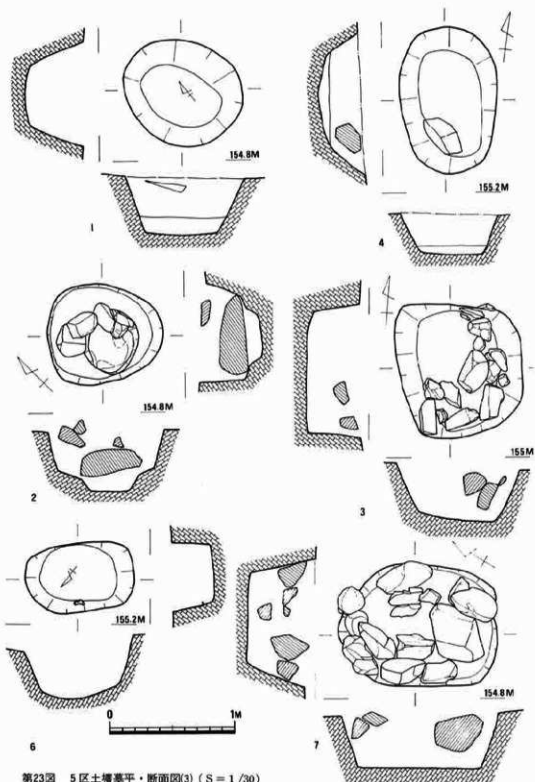
名称	形状	長さ	短辺	厚さ	出土遺物	石	タイプ
火葬墓1	楕円	(96.5)	96.5	7.0	銅銭(政和通宝1, 永樂通宝1, 不明1)	○ 人頭大1	C
2	楕円	(124.0)	102.0	11.0	土師皿1, 発生片, 銅銭(不明2)	○ かなり大きい石1	C
3	隅丸長方	111.0	67.0	31.5	土師皿5, 銅銭(洪武通宝1, 永樂通宝1, 不明2), 鉄釘	○ 底に敷いている	C
4	隅丸長方	100.5	77.0	32.5	土師皿6	○ #	C
5	楕円	139.0	103.0	30.1	土師皿1, 発生片	○	C
6	隅丸長方	84.5	71.5	40.0	土師皿1	○ 底に敷いている	C
7	楕円	106.5	78.0	38.5	土師皿4+1	○	C
8	楕円	104.5	81.0	15.0	銅銭(不明3+α)	○ 底に敷いている	C
9	隅丸長方	121.5	79.5	38.0	銅銭(不明2)	○ #	C
10	楕円	(59.0)	68.0	13.0			C
11	楕円	105.0	65.0	12.0		○	C
12	隅丸長方	96.5	51.5	3.0		○ 小さいのが1つだけ入っている	C
13	隅丸長方	108.0	78.0	32.5	土師皿1, 鉄釘	○ 底に敷いている	C
14	隅丸長方	(84.0)	85.0	32.5		○ #	C
土藏墓1	楕円	94.0	82.0	48.0			A
2	楕円	93.0	77.0	48.0		○	B
3	隅丸長方	150.0	99.0	42.0	土師皿1	○	B
4	楕円	119.0	76.5	34.0	土師皿1, 須恵器片	○ 人頭大1	B
5	楕円	123.5	95.0	31.5			A
6	隅北長方	89.0	54.0	42.0	土師皿1		A
7	隅丸円	129.0	101.0	42.5	銅銭(天聖元宝2, 永樂通宝1, 不明1)	○ 多数	B
8	楕円	99.0	51.0	43.0		○	B
9	楕円	92.0	71.0	30.5		○	B
10	隅丸長方	77.0	67.0	19.0		○ 2	B
11	楕円	123.0	67.5	29.0	土師皿1	○	B
12	隅丸長方	160.0	144.0	35.5	陶器皿1, 鉄釘		A
13	楕円	(34.0)	86.0	(14.0)			A
15	楕円	102.0	76.0	42.0		○ 多数	B
15	隅丸長方	146.0	87.0	34.5	陶器皿1		A
16	楕円	97.0	81.0	35.0			A
17	楕円	(53.6)	76.0	41.0		○ 多数	B
18	楕円	(44.0)	65.0	36.0	土師皿1	○ #	B
19	楕円	96.5	73.5	12.0			A
20	楕円	121.0	64.0	47.5	土師皿2, 銅銭(祥符通宝1, 熙寧元宝2, 政和通宝2)	○ 多数	B
21	隅丸長方	83.0	59.0	39.0		○ 3	B
22	楕円	92.0	51.0	18.0		○ 2	B
23	楕円	79.5	53.5	8.5			A
24	楕円	107.5	93.0	47.5		○	B
25	楕円	87.0	65.5	29.5			A
26	円	81.5	70.0	18.5	土器片1, 鉄釘1		A
27	楕円	86.0	45.0	19.5	土師皿1		A
28	楕円	39.0	31.0	34.0	土師皿2		A
29	円	100.5	98.5	21.0			A
30	円	56.5	50.0	28.0	発生片		A
31	楕円	(107.5)	(89.0)	23.0		○ 多数	B
32	楕円	50.0	38.5	27.0		○ 1	B



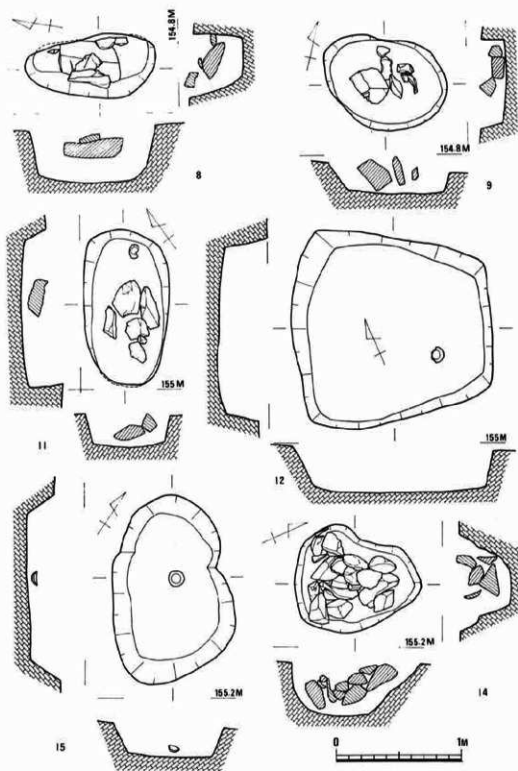
第21图 5区土壩基(火葬)平・断面图(1) (S=1/30) 0 1m



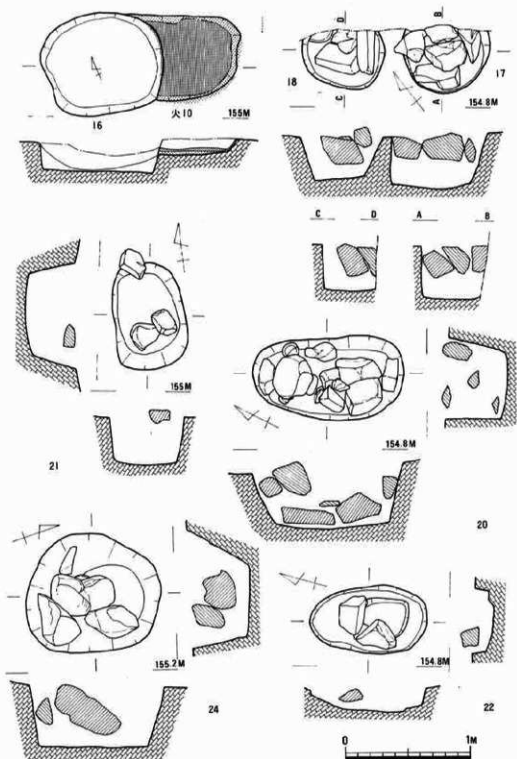
第22图 5区土坑墓(火葬)平·断面图(2) (S=1/30)



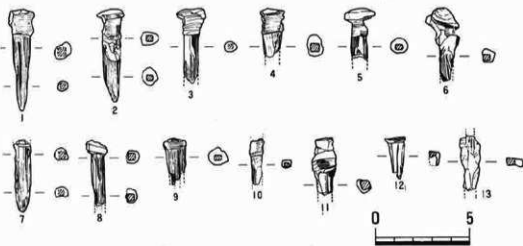
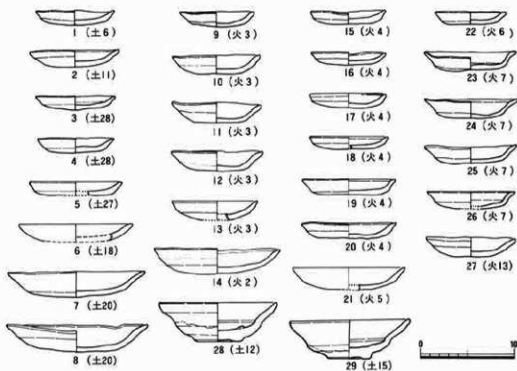
第23图 5区土墳基平・断面图(3) (S = 1/30)



第24图 5区土坑墓平·断面图(4) (S = 1/30)



第25图 5区土坑墓平·断面图(5) (S=1/30)



第26图 5区土坑墓出土遗物 土器 (S=1/4), 钉 (S=1/2), 铜钱 (S=1/1)

しており良質のものではない。その特徴から瀬戸系の焼物と思われる。

土器以外の貴重な遺物として銅銭の出土がある。その内訳は表2に示したとおりである。大葬墓出土のものは熱を受けており文字の判読不可能なものもあるが、可能なものは祥符通宝(初録年1008年)から永樂通宝(1403年)までの6種類である。

銅銭以外には鉄釘が出土している。図示したものは全て土壌12から出土したものである。他にも火-3、火-4からも出土しているが、熱のために取り上げの際に細片となったため図示することはできなかった。

土壌墓出土の土師皿の時期は明確には捉え難いが、類似の土師皿が多数出土した赤野遺跡(注1)などを参考に室町時代のものとする。また一緒に出土した銅銭の年代から、永樂通宝の流入以降、寛永通宝の普及以前ということも考慮に入れてこれらの土壌墓の年代は室町時代後半～江戸時代初

頭にかけての一時
期と考える。

注(1)

岡山県教育委員会
『赤野遺跡』岡山
県埋蔵文化財発掘
調査報告書(3)
1973年

表3 第5調査区土壌内出土土器一覧表

単位 cm

No	名称	口径	器高	色調・胎土	出土地	備考
1	土師皿	8.3	1.6	淡赤褐色 やや不良0.5~2mm大少し	土-6	ススの付着痕
2	"	9.4	1.7	薄茶色 良 0.5~2mm大	土-11	
3	"	8.5	1.5	淡赤褐色~薄茶色 良	土-28	
4	"	8.2	1.6	" 良	"	
5	"	9.8	1.5	薄茶色 やや不良1~3mm大少し	土-27	
6	"	12.1	1.8	" 良好 1mm以下	土-18	
7	"	14.6~15	2.7	" やや不良3~5mm大時々有	土-20	
8	"	15.1	2.0~2.8	乳白色 " 0.5~2mm大少し	"	
9	"	7.8	1.7	薄茶色 良 1mm以下	火-3	
10	"	9.3	2.0	淡赤茶色 " " "	"	
11	"	9.6	2.2	淡赤褐色 " 2mm以下	"	
12	"	9.5~9.8	2.1	薄茶色 " " "	"	
13	"	8.5	2.0	" " 1mm以下	"	
14	"	13.4	2.8	淡黄褐色 " 1~2mm大	火-2	
15	"	8.0~8.2	1.1~1.3	" " 1~2mm大	火-4	
16	"	8.0	1.2	淡赤黄褐色 " 1~2mm大	"	
17	"	8.1	1.6	薄茶色 " 1mm以下	"	
18	"	8.4	1.3	" " " "	"	
19	"	10.0	1.5	淡黄褐色 " 1~2mm大	"	
20	"	10.1	1.6	薄白茶色 " 1mm以下	"	
21	"	12.0	2.4	乳白色 やや不良2mm大多い	火-5	
22	"	7.6	1.3	淡黄褐色 良 0.5~2mm	火-6	
23	"	9.9	1.7~2.4	淡黄褐色 良 0.5~2mm	火-7	
24	"	10.0	1.7~2.0	淡黄褐色 やや不良1~3mm多し	"	
25	"	9.8	2.2~2.5	淡黄褐色 やや不良0.5~2mm多	"	
26	"	9.4	1.8	薄茶色 良 0.5~2mm	"	
27	"	9.5	2.0	淡赤褐色 良 1mm以下	火-13	ススの付着痕
28	陶器皿	12.4	4.1		土-12	
29	"	12.8	3.6~4.4		土-15	

第6節 第6調査区

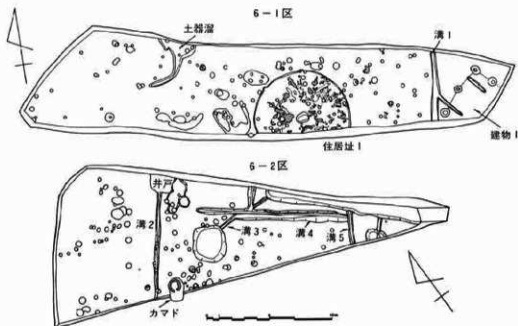
6区は遺跡の所在する丘陵の上位に近い尾根部分に位置する。6区は調査前は2枚の水田であったが隣接する2枚は約1.1mの比高差があり、それぞれの遺構の時期が異なる為低い方を6-1区、高い方を6-2区とした。

6-1区は36m×8mの細長い調査区である。遺構は1区、2区でも堆積していた暗茶褐色土で検出することができる。暗茶褐色土は溝1付近からは認められず、地山の上には黄褐色土が堆積していた。また暗茶褐色土には弥生式土器を包含しており、黄褐色には近世の遺物を包含していた。当調査区から検出された遺構は住居址1、溝1、建物1、土壌1と多数の柱穴群である。

6-2区は1区の東隣であるが、丘陵の頂部にあたるため堆積土の状況は6-1区とは異なる。東半分は耕作土の直ぐ下が黄茶褐色土の地山となっているが、西に向って石を多数含む灰茶褐色の造成土が徐々に堆積していつている。これは畑を造成する際に埋めた土で、この中には近世の遺物を多く包含していた。遺構は地山土から切込まれているが、上半は削平されている。検出した遺構は溝5、不明の掘り込み2、竈1、井戸1柱穴多数である。

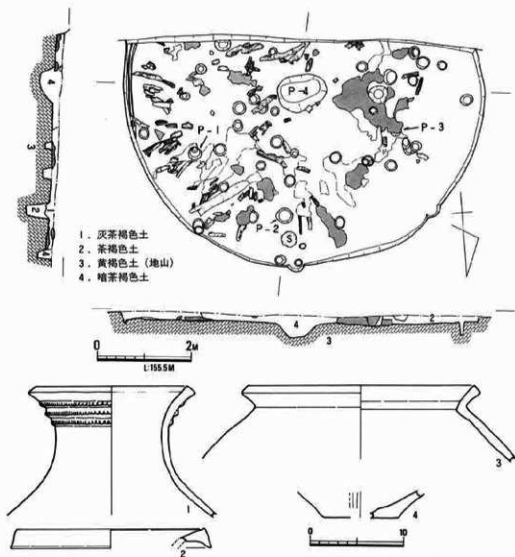
住居址1 (第28図, 図版6)

6-1区のはば中央付近に全形の約骨を検出し住居址は直径7.7cmを測る円形の竪穴住居址で



第27図 6区遺構全体図 (S=1/300)

ある。この住居址は大災にあったもので多くの炭化物や焼土が出土した。炭化物は主に柱材で、樹皮が付着したままのものが多く見られる。焼土は炭化物と混在しており、炭化物と同時に火を受けて堆積した状態を示すが、炭化物は全体に散布した状態であるのに対し、焼土は住居址の端からはあまり検出されなかった。支柱は5本で他に中央ピットを検出した。中央ピットは住居址のほぼ真中に位置し、106cm×76cmを測る不整楕円形を呈し、深さは30cmのあまり深くないものである。床面は堅牢にできており覆土とは明確に掘り分けられる。また住居址の北端付近からは直径約33cm、厚さ7cmの上面の平坦な石が1個置かれていた。同様の石は1区H-1からも出土している。この住居址の特徴としては壁体溝が一部にしか見られないことである。



第28図 6区住居址1平・断面図 (S=1/80), 出土遺物 (S=1/4)

東側で2m程認められただけで精査したが他では認められなかった。

遺物 (第28図、図版10) 床面から壺形土器と甕形土器が出土している。壺形土器はラッパ状に開く口縁をもち頸部には爪形文を施した凸帯文がめぐる。甕形土器はくの字に屈曲する口縁をもち端部は上下にやや肥厚している。時期は弥生中期の中葉頃と考えられる。従って住居址の時期も同じと考える。

土器溜 (第29図)

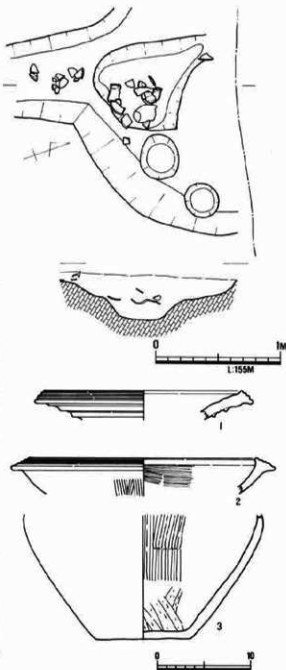
住居址の西方約6mのところを位置する。調査区の端にあるため全体を検出したわけではない。現状は不整楕円形を半分にしたような形をしており、なだらかに中心に向かって深くなり中心部分の一段低くなつたところに土器が集中していた。遺構は暗茶褐色土から掘り込まれており、中には暗褐色土が入っていた。

建物 I (第30図)

6区の東端に柱穴が4本検出された。現状では2間×1間の建物だが、全形を検出していないため建物の規模は不明である。柱穴の中の埋土は灰褐色土で、まだ十分に腐蝕していない土であり、建物からの遺物は出土していないが時期は不明だが、比較的新しい時期と考えられる。又遺構上面の包含層からは近世の陶磁片が出土している。

竈 (第31図、図版7)

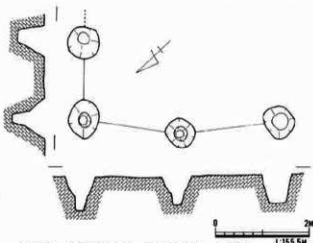
6-2区からは江戸期と考えられる新しい遺構ばかりが検出された。そのうちおもしろい遺構と思われる竈についてのみ述べる。竈は茶褐色土を掘り込んで作られており、検出時には焼



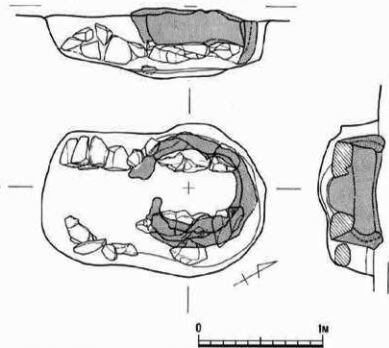
第29図 6区土器溜平・断面図 (S=1/30)
出土遺物 (S=1/4)

土壁はドーム状に築きあげられ、上面の一方が欠けた平面馬蹄形状を呈していた。焼土は厚さ10cm余りを呈し、内側は赤褐色に、外側は赤色に強く熱を受けており、スサや小石を含まない土で築かれている。焼土の一方は欠けたものではなく焚き口のため最初から無い。竈の中の埋土は粉化した木炭が間に薄茶褐色土を挟んで2層にわたって堆積していた。そのことから使用は一度中止して、しばらくの後再度使用したのであろうか。構築はまず、1.8m×1.1~1.25mの不整形円形の穴を掘り、長辺の両側に石を並べて置き、北側の半分のみの上に粘土で壁を築

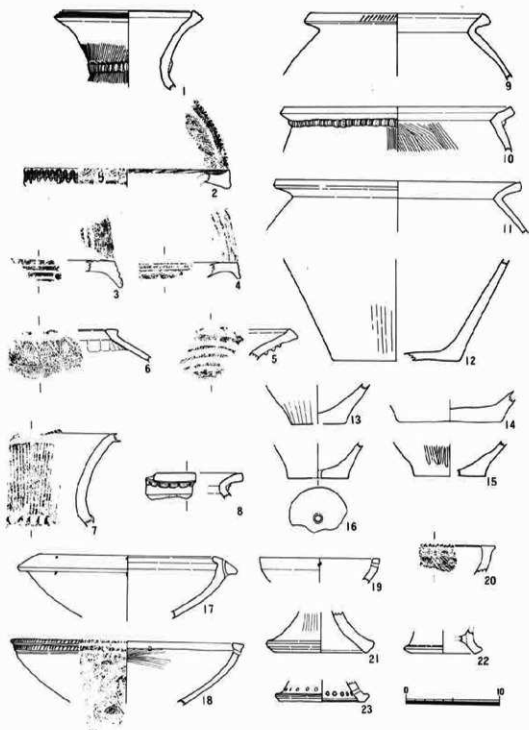
いている。従って壁に接する部分の石は強い熱を受けたらしくよく焼けており、長さ30cmくらいの大きな石を使用しているにも関わらず熱により多くのヒビが入っていた。また底面も高温を受けたもようであって青灰色を呈し、非常に堅牢に焼けてしまっていた。



第30図 6区建物I平・断面図 (S = 1/80)



第31図 6区カマド平・断面図 (S = 1/30)



第32图 6区出土遗物(S=1/4)

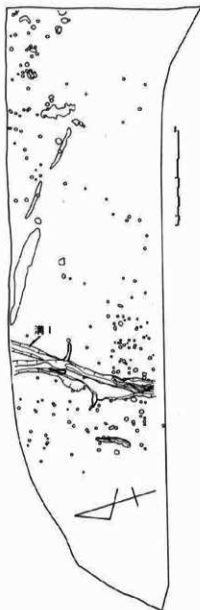
6 区出土遺物 (第32図, 図版10)

全て弥生式土器で暗茶褐色土層から出土した。1～7は壺形土器で大きく3つのタイプに分かれる。1つはラッパ状に開く口縁をもつもの(1, 5)そしてラッパ状に開いた後水平に伸びる口縁をもつもの(2～4)他1つは逆に細い口縁から体部へ向って広がっていくものとの3タイプである。いずれも口縁は波状文, 凹線文などの装飾が施されている。8～11は甕形土器で, く字に屈折する口縁をもつ。12～15は壺形土器もしくは甕形土器の底部である。16は底部に直径3cmの小穴を穿つこしきである。17～20はボール状の杯部をもつ高杯形土器である。18～20の口縁端部は特別強調されていないが, 17は上下に拡張された口縁端部をもつ。

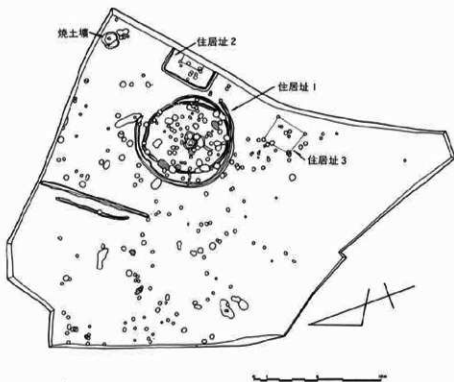
第7節 第7調査区

7区は本調査範囲の中では一番上にあって調査面積も一番広い。7区は調査の関係上2つに分けて調査した。便宜上西側を7-1区, 東側を7-2区と呼ぶ。7区は, 高屋部落の集落に一番近くなだらかな丘陵の尾根部分全体に及んでおり, 南側の尾根頂部を頂点に三方へ傾斜している。7-2区は調査前は階段状に細長い3枚の畑になっていたため堆積土は非常に浅く, 耕作土の直下が黄褐色土の地山となっている。特に南側の高い方は畑を造成する際により削平されている。北東側へ向かっては徐々に低くなり, 北半分には暗茶褐色土が堆積していた。遺物は主に暗茶褐色土中に包含されていた。7-1区から検出された遺構は西半に溝が1本検出されている他は柱穴群のみであった。柱穴群の検出された暗茶褐色土中には弥生式土器片が多数包含されていた。溝の中に入っていた埋土は砂利～30cm大の河原石を含む灰褐色土が入っていた。溝の埋土中から羽釜の破片と粘薬を塗った甕片が出土しており, 時期は近世のものと考えられる。

7-2区も調査前は畑で, 北側の高い部分は地山自



第33図 7-1区遺構全体図
(S=1/400)

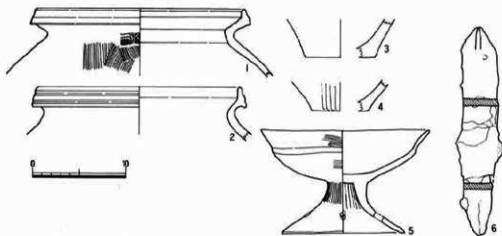
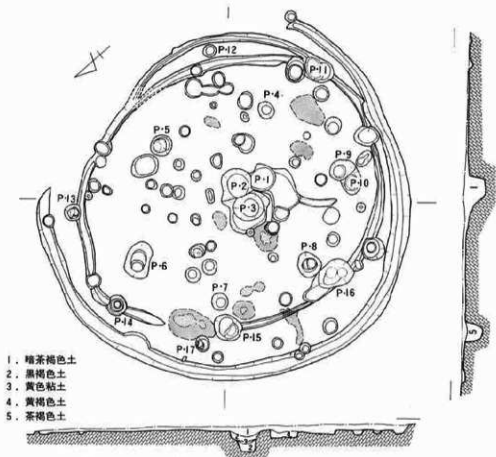


第34図 7-2区遺構全体図 (S=1/300)

体が削平されていて遺構は南側約号に集中して検出された。7-2区の東側は急斜面になるためH-2から焼土遺構にかけては堆積土はかなり厚くなる。北に向けては暗茶褐色土の堆積が見られるが、出土遺物はあまり多くない。7-2区から検出された遺構は住居址3、焼土遺構1、溝2、柱穴多数である。

住居址1 (第35図、図版8)

7-2区の中央よりやや東寄りにあり、全形が調査区域内にある。しかし、全体に削平を受けており、特に東側は著しく、壁体溝の一部を検出することができなかった。住居址1は円形の竪穴住居址で、ほぼ同心円状に3回の建て替えが行われている。古い順にそれぞれa、b、c、とすると最も古いa住居址については、東側の壁体溝の一部と中央ピットがわかるのみで全形は不明である。b住居址は直径6.4mを測り、主柱穴はP-4～P-9の6本柱である。最も新しいc住居址は直径7.8mを測る。主柱穴はP-10～P-17の7本柱であるが、P-12と13の間にもう1本あった可能性もあり、8本柱とも考えられる。中央ピットは3回の建て替えに



第35图 7区住居址1平·断面图 (S=1/80)
 出土遗物 (S=1/4) 铁器 (S=1/2)

応じて掘り直されており、第35図の1、2、3の順に新しくなっていく、中央ピットの中の埋土は、1、2のものはc住居址を作る際に埋めたと思われる、床面の土と同種の土が入っていた。しかし中央ピット3のものは灰、炭化物の混じる黒褐色土が入っていた。

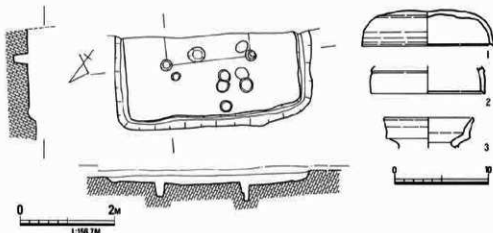
住居址床面にはいたる所に焼土面が認められた。赤色に弱く熱変したものもあれば、中心が赤橙色にその周囲が赤色にしっかりと熱変しているものもある。これらの焼土址は大災を受けた形跡もなく、火災に由来するものではない。

遺物 (第35図、図版10)

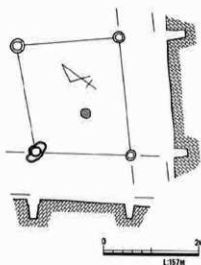
床面から出土したのは2～6で、1はP-17の中に入っていた。1、2は甕形土器、3、4は壺または甕の底部である。5は高杯形土器で、検出時にはかなり表面が剥離していたが、部分的に外面には横位のヘラミガキを施している。成形は杯部を別に作ったのち接合している。6の鉄器は5の高杯形土器のすぐ近くから出土した。全体が赤錆化していて全形はとどめないが、先端が刃部になっていて、断面は細くなっているが、両側は太いままである。種類はヤリガンナのようなものだろうか。これらの出土遺物の時期は、その特徴から1がやや古い様相を呈しているが、2、5の時期を弥生時代後期中葉と考える。1は住居址に伴うピットではないことから最終使用のc住居址の時期は弥生時代後期中葉頃と考える。

住居址2 (第36図、図版8)

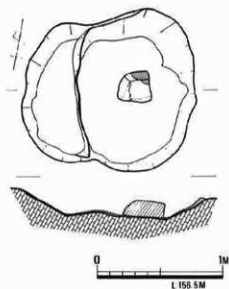
住居址2は住居址1の東側に住居址1とほとんど接する位置から検出された。ちょうど調査区の端にあたるため、全形の $\frac{1}{2}$ を検出したのみである。住居址2は1辺約4.15mを測る隅丸方形の竪穴住居址で、支柱は4柱であるが、調査区内からは2本検出された。住居址2は比較的残存状態は良好で床面も削平された痕跡はなかったが、検出範囲内では焼土面は全く認められ



第36図 7区住居址2平・断面図 (S=1/80)、出土遺物 (S=1/4)



第37図 7区住居址3平・断面図 (S = 1/80)



第38図 7区焼土壇平・断面図 (S = 1/30)

なかった。また、壁体溝もわずかにくぼむ程度で非常に浅い。中央ピットは調査区域外に存在する可能性が強い。

遺物 (第36図)

1, 2は須恵器の杯蓋である。1は口径13.9cm, 器高3.7cmを測る。2は口径12.0cm, 推定高4.5cmを測る。どちらも天井部は弱までへら削り調整である。また、口縁端部は内側に段がつく。1は天井部と体部の境が不明瞭であるが、2は明瞭な段線で分れる。3は弥生式土器片であるが、後世の流入であろう。この須恵器の時期は、その特徴から6世紀中葉頃と考えられる。従って住居址の時期は6世紀中葉頃の一時期を与えたい。

住居址3 (第37図)

住居址3は住居址1の南約2mのところからかなり検出されたが、丘陵頂部に近くなるため削平はかなり進んでおり壁体溝は検出されなかった。主柱と考えられる4本の柱穴の心々間の距離は2~2.5mであり、住居址2と大差ない。主柱で囲まれた部分には現状で20cm大の焼土面が認められる。中央ピットは認められなかった。出土遺物はない。

焼土壇 (第38図)

調査区の東コーナーの近くから検出された。焼土壇は地山の上層の暗茶褐色土の上面から検出されている。焼土壇は暗茶褐色土を掘り込んで中で何か火をたいたものと思われるが、熱影響はあまり強くなく、検出時には暗茶褐色土中に焼土片が輪を描くような形で検出された。壁面は1~2cmの厚さに熱が及んでおり、赤橙色に熱変している部分もあるが、底部は全く熱の

及ばない部分も見られた。底部には河原石を半分に割った25cm大の石が1個置かれていた。石は北側の一部が熱によって橙色に変化しており、焼土壌に伴うものである。壁面はもとはもう少し高かったと思われる。現状では全体のすぐらの位置で1つ仕切りができています。しかし、

この仕切りは切り合ってきたものではなく、焼土壌が仕切られていたものと思われる。出土遺物は埋土の中に弥生式土器片や近世陶磁器片などの極小破片が入っていたが、磨滅が著しいものばかりで、後世に流入したものと思われる。時期は不明であるが、住居址1や住居址2の検出される層位よりは上であり、畑の造成土である河原石を多数含む灰黄褐色土よりは下である。よって住居址2よりは新しい時期であり、畑の造成時よりは古い時期の間である。

7区出土遺物 (第39図、図版10)

ほとんどのものが暗茶褐色土からの出土である。1は表採したもので縄文式土器である。2～22は弥生式土器で2～4は壺形土器、5～13は甕形土器、14～21は壺形土器または甕形土器の底部、22は高杯形土器である。23は土師器である。弥生式土器は新しい時期のものもいくつかあるが中期中葉のものが一番多く包含されている。一点だけ土師器が出土しているが、須恵器はほとんど見られなかった。

第8節 その他の出土遺物 (石器) (第40～42図、図版10)

出土遺物は各調査区ごとに取り上げたが、石器については点数が少ないことと、大部分が遺構に伴わない表土層からの出土であることから一括して説明する。

1～4はサヌカイト製石鏝である。1は5区の土壌26出土。2は7区H-1出土。3、4は暗茶褐色土層出土である。

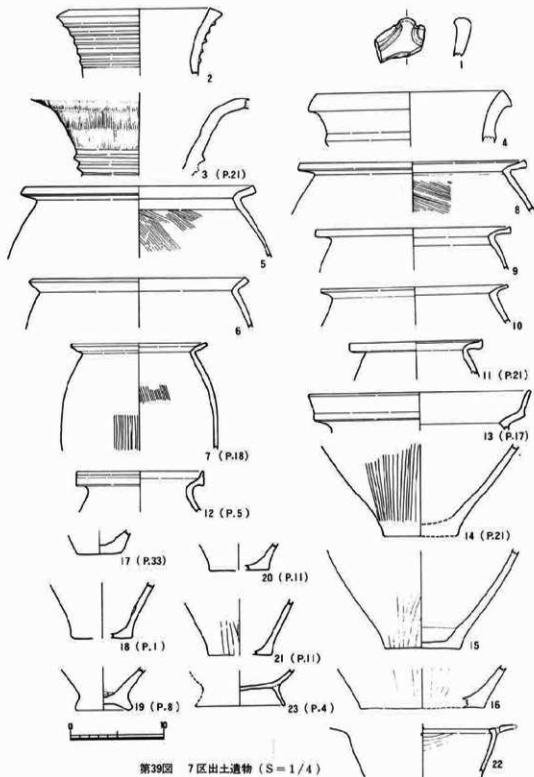
5は石楯である。石材はサヌカイトで風化が進んでおり外表面は灰白色を呈す。6、7はサヌカイト製打製石庖丁である。どちらも6区の暗茶褐色土中より出土した。7は破片のため石庖丁と断定し難いがここでは一応石庖丁と考える。

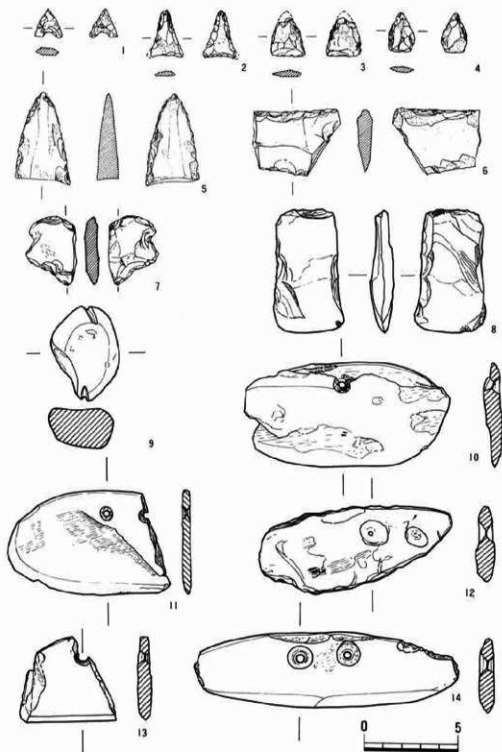
8は石ノミである。2区表土層から出土した。石材は淡緑灰色を呈する緑色片岩系の石である。全面を打ち欠いて整形した後刃部を研磨している。

9は石鏝で6区の包含層からの出土である。暗灰色を呈し、河原石を用いている。

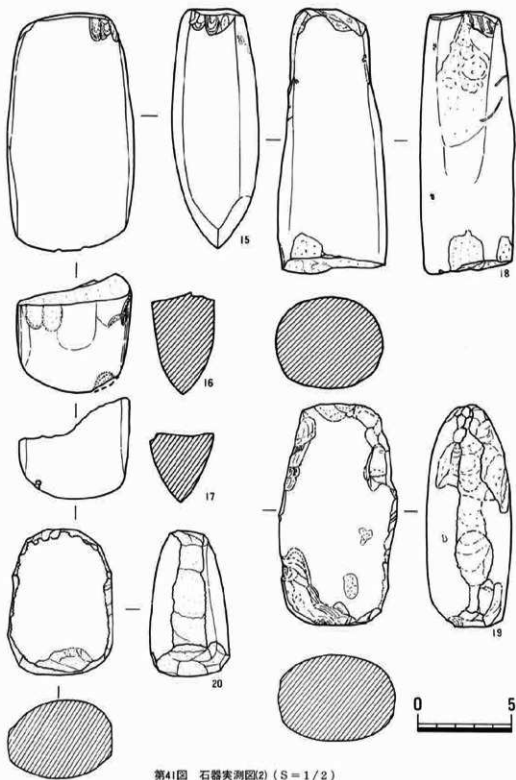
10～14は磨製石庖丁である。色調は淡緑灰色を呈し石材は10、12～14は緑色片岩系と思われる。11は暗緑灰色を呈し、0.5～1mm大の白い結晶が見られ、石材は他と異なる。穿孔痕は10、12を除いて他は全面研磨のあと回転運動を利用した用具によって能率よくあけられている。

14は全形を打ち欠き整形後、穿孔部に表裏から敲打を加えて薄くし、最終的には他と同様回転を利用してあけられている。12は未製品で製作技法をよく示しており、2孔のうちの1孔は敲打により直径2mm大の小孔があいているが、他の1孔は未貫通である。

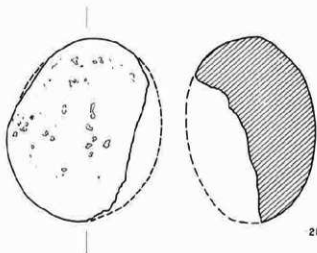




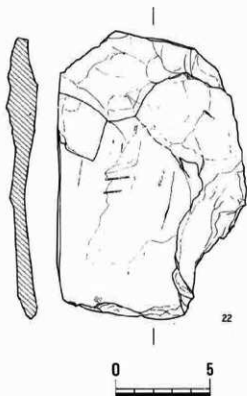
第40图 石器实测图(1) (S = 1/2)



第41回 石器実測図(2) (S=1/2)



21



22

第42図 石器実測図(3) (S=1/2)

15-17は磨製石斧である。15は6区表土層、16は2区のビット内、17は7区表土層からの出土である。3つとも刃部は部分的に欠けており、使用の痕跡が認められる。18は石棒であろうか。破面は折れたままで使用痕は認められない。

19、20は敲き石である。7区表土層からの出土である。どちらも磨製石斧を転用した二次加工品である。側面には片手で握ると非常に握り易いように敲打が加えられている。底面の平坦面は磨耗痕が認められる。

21は磨石である。7区のP-14からの出土である。

22は砥石で厚さの薄い扁平な形をし、使用痕はかなり磨耗している。石材は砂岩であるが、火をうけており全体に赤褐色に変色している。出土地点は火災をうけた6区のH-1近くであり、住居址の火災の時に一緒に火をうけたものであろうか。

第9節 まとめ

今回の発掘調査で明らかになったことの1つは、本遺跡が弥生時代中期から奈良時代にかけての集落址であるということである。本遺跡は確認調査の段階においても弥生時代～奈良時代の集落址であると想定されていた。検出した住居址は7軒でその内訳は弥生時代中期1、弥生時代後期1、古墳時代2、古墳時代末～奈良時代1+α、時期不明1である。住居址は各時期に分散しており一時期に集中してはいない。落合町内において弥生時代の住居址は宮の前遺跡(注1)、須内遺跡(注2)、且原遺跡(注3)、下市瀬遺跡(注4)がある。そのうち前期は宮の前遺跡で1軒、中期は且原遺跡で2軒検出されており、人々は中期頃から町内各地に少しずつ集落を形成していったと思われる。また、今回の発掘調査は切土部分についてののみ実施したが、調査区域外にもっと多くの住居址の存在する可能性は十分ある。遺構は検出されなかったが、縄文式土器、石鏃など縄文時代の遺物もいくつか出土しており、当地域は縄文時代以降今日まで生活の場とされてきたことが伺える。

また当地域は真嶋郡衙の比定地とされてきているが、それに関連する遺構は今回の発掘調査では検出することはできなかった。しかし、奈良時代の須恵器は多量に出土した。特に興味をひくことは、古墳時代の須恵器は比較的少量しか出土せず、しかも杯蓋のかえりを持つタイプ(注5)の時期のものは全く認められず、突然杯蓋のかえりが消失する時期のものから検出される。つまりある時期を境に当地域に何らかの変化が伺えるわけで、その時期はちょうど8世紀の中頃にあたり、美作地方に郡衙が置かれる時期(注6)と一致する。よって当遺跡が真嶋郡衙跡であることの証明はできなかったものの郡衙が設置された時期の遺物が多量に検出されることから当遺跡周辺の未調査区に郡衙跡が存在する可能性は否定しきれない。

今回の調査で注目されることのもう1つは室町時代末期の土壌墓の出土である。近年中世墓の発掘例は年々増加しているが、本遺跡の例のように土葬墓と火葬墓が同一地点から検出された例は希である。しかも土葬墓と火葬墓の間には埋葬品の区別も、时期的な差もない。さらに土葬墓も土壌を掘って埋めただけのものとその上に石を積んだものとの2種類が認められる。中世墓が3種類に分れる原因としては被葬者の身分を始めとして宗旨の違い、死因の相異などが考えられるが、今回の調査ではそれを解明することはできなかった。また紙数の都合もあって十分な考察ができなかった。今後の課題としたい。

- 注 (1) 岡山県教育委員会『宮の前遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告(12)1976年
(2) 岡山県教育委員会『須内遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告(11)1976年
(3) 岡山県教育委員会『且原遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告(11)1976年
(4) 岡山県教育委員会『下市瀬遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告(3)1973年
(5) 岡山県内の産出出土のものでは新杯(宮山前)産地の第2類、赤風古産地群のB類に比定される時期である。
(6) 久米郡衙跡とされている宮地遺跡、美多郡衙跡とされている高本遺跡から同時期の須恵器が出土している。

(1) 福田 A 遺跡全景
(西から)



(2) 第 1 調査区全景
(西から)



(3) 第 1 調査区住居址 1





(1)第 2 調査区全景
(西から)

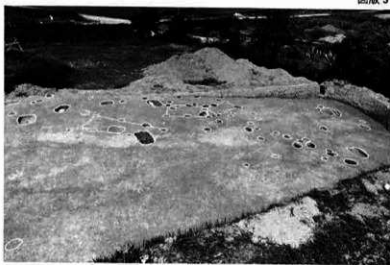


(2)第 2 調査区住居址 1



(3)第 2 調査区土構 33

(1)第4調査区全景
(東から)



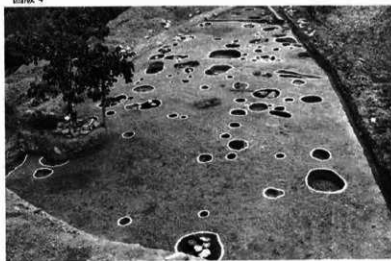
(2)第4調査区土壇 4



(3)第4調査区土壇 5



図版 4



(1)第 5 調査区全景
(西から)



(2)第 5 調査区全景
(東から)



(3)第 5 調査区土坑 15

(1)第 5 調査区土壇 10(右)
土壇 11(左)



(2)第 5 調査区火葬墓 3



(3)第 5 調査区火葬墓 3
(焼土除去後)

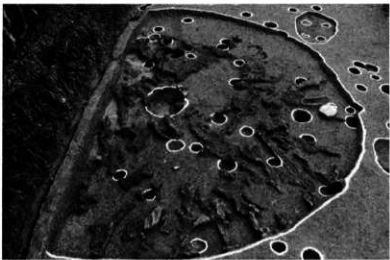




(1)第 6 調査区(西半分)全景 (東から)



(2)第 6 調査区(東半分)
全景 (西から)



(3)第 6 調査区住居址

(1)第6調査区カマド



(2)第7-1調査区全景
(西から)



(3)第7-2調査区全景
(北から)





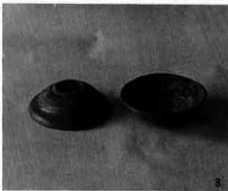
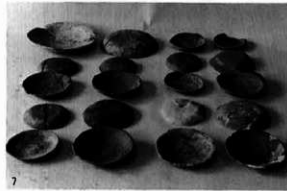
(1)第7調査区住居址1



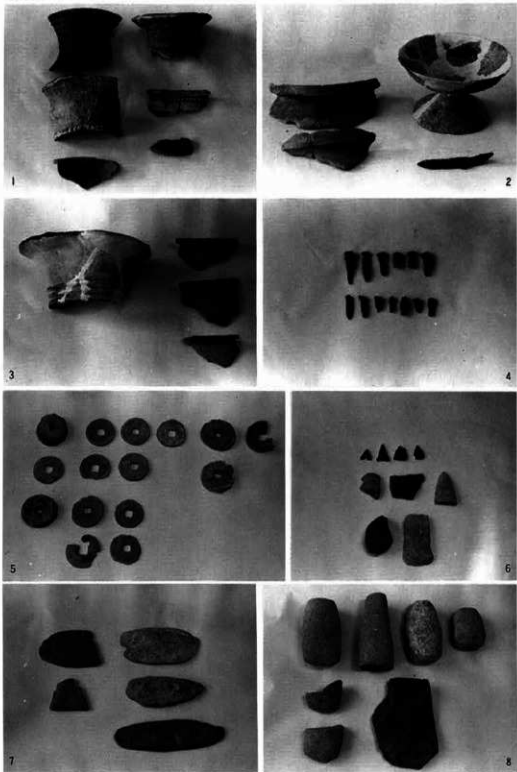
(2)第7調査区住居址2



(3)遺跡見学会 風景



1. 1区出土土器
 4. 2区住居址1出土土器
 7. 5区土墳墓出土土器
 2. 1, 7区出土縄文式土器
 5. 5区溝1出土土器
 8. 5区土墳12, 15出土土器
 3. 2区土墳33出土土器
 6. 4区出土土器



1. 6区出土土器

2. 7区住居址1出土遺物

3. 7区出土土器

4. 5区土墳墓12出土鉄釘

5. 5区土墳墓出土銅銭

6.~8 福田A遺跡出土石器

高屋 B 遺跡

目 次

第4章	高屋B遺跡	70
第1節	第1地点の調査概要	71
第2節	第2地点の調査概要	82
第3節	第3地点の調査概要	86
第4節	遺構に伴わない遺物	91
第5節	ま と め	97

図 目 次

第1図	高屋B遺跡調査区 (S = 1/3000)	70
第2図	第1地点1区遺構全体図 (S = 1/300)	72
第3図	2号墳平・断面図 (S = 1/120)	73
第4図	第1地点2a区遺構全体図 (S = 1/300)と出土遺物 (S = 1/4)	74
第5図	第1地点2a区1号墳平・断面図 (S = 1/100)と出土遺物 (S = 1/4)	75
第6図	第1地点2a区建物I, II, III平・断面図 (S = 1/100)	77
第7図	第1地点2a区遺構内出土遺物 (S = 1/4)	78
第8図	第1地点2b区遺構全体図 (S = 1/240)	79
第9図	第1地点2b区3, 4号墳平・断面図 (S = 1/160)	80
第10図	4号墳周堤内出土遺物 (S = 1/3, 1/4)	81
第11図	第2地点遺構全体図 (S = 1/350)	83
第12図	第2地点1区建物平・断面図 (S = 1/100)	84
第13図	第2地点1区土壇1平・断面図 (S = 1/60)と出土遺物 (S = 1/4)	84
第14図	第2地点1区溝、柱穴平・断面図 (S = 1/60)	85
第15図	第2地点1, 2区遺構内出土遺物 (S = 1/4, 1/8)	85
第16図	第3地点1区遺構全体図 (S = 1/150)	86
第17図	第3地点1区土層断面図 (S = 1/50)	87
第18図	第3地点2a, b区遺構全体図 (S = 1/300)	88
第19図	第3地点2区建物平・断面図 (S = 1/100)	89
第20図	第3地点遺構内出土遺物 (S = 1/4)	90
第21図	第1地点1, 2区出土遺物 (S = 1/4)	92
第22図	第1地点2区出土遺物 (S = 1/4)	93

第23図	第1地点2区出土遺物 (S = 1/4).....	94
第24図	第3地点1, 2区出土遺物 (S = 1/4).....	95
第25図	第1地点2区, 第3地点1, 2区出土遺物 (S = 1/2).....	96
第26図	高屋B遺跡遺構全体図 (S = 1/1000).....	99

図 版 目 次

図版 1	(1) 高屋B遺跡遠景 (北西から)
	(2) 第1地点遠景 (東から)
	(3) 第1地点1区遺構全景 (北東から)
図版 2	(1) 2号墳周濠内遺物出土状況 (南西から)
	(2) 第1地点2a区遺構全景 (西から)
	(3) 2a区1号墳全景 (南から)
図版 3	(1) 1号墳周濠内遺物出土状況 (北西から)
	(2) 第1地点2b区遺構 (3号, 4号墳) 全景 (西から)
	(3) 4号墳周濠内遺物出土状況 (北西から)
図版 4	(1) 第2地点1区遺構全景 (南から)
	(2) 第2地点2区遺構全景 (西から)
	(3) 第3地点1, 2区全景 (南東から)
図版 5	(1) 第3地点1区遺構全景 (南西から)
	(2) 第3地点2a区遺構全景 (南から)
	(3) 2a区建物I全景 (南から)
図版 6	(1) 2a区建物II全景 (南から)
	(2) 第3地点2b区遺構と建物I全景 (南から)
	(3) 2b区建物II全景 (南西から)
	(4) 2b区建物III全景 (南西から)
図版 7	出土遺物写真
図版 8	出土遺物写真

第4章 高屋B遺跡

高屋B遺跡の遺跡範囲は、昭和55年度に確認調査を実施して約14,000㎡を確認している。

(注1)

今回報告する第1～3地点の調査は道路や圃場整備で削平される地区である(第1図)

第1地点は昭和55年度にあらたに確認された地区である。高屋B遺跡の西端に位置し、南西から北東に延びる丘陵尾根部および緩斜面にあたる。この地区は小字が「塚の元」と称し、確認調査においては、溝状遺構、柱穴等を検出し、古墳時代～奈良時代の遺物を出土した地区であった。(注2)

第2、3地点は従来から云われていた高屋B遺跡の西端に位置し、ゆるやかな同一丘陵尾根部に存在する調査区である。この地区の小字は「オイエバク」と称する。確認調査では掘立柱建物、土塼、柱穴を検出し、奈良～近世までの遺物を出土している。(注3)

確認調査の結果では、高屋B遺跡は遺物では弥生後期から近世まで出土したが、その大部分が奈良時代の遺物であることから、奈良時代の遺構が本調査区の主要な遺構と考えられていた地区である。

今回の調査で検出された遺構についてその概要を記すと、まず古墳の検出と奈良時代の掘立柱建物をあげることができる。古墳を検出した地区は第1地点である。4基の古墳はいづれも



第1図 高屋B散布地調査区 (S=1/3000)

墳丘が削平され、周濠のみであった。古墳の規模は直径9～12mであり、円墳であった。この地区における群集墳がさらに追加確認されたことである。奈良時代と考えられる掘立柱建物はその第3地点2区において3棟検出されたが、いずれも倉庫と考えられるものである。その他に、土壌（弥生時代終末、奈良時代、近世）奈良時代の溝状遺構、江戸時代の掘立柱建物等を検出している。

今回報告する調査区だけでは決して遺跡全体を把握することはできないため、問題点は残るが、日名地区の歴史を考えるうえでの成果はそれなりにあったと思われる。以下各節で調査結果について報告したい。

注

- (1) 岡山県教育委員会『高屋B散布地、福田A、B散布地』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告(45)1981年
- (2) (1)に同じ
- (3) (1)に同じ

第1節 第1地点の調査概要

第1地点は道路敷部分と園場整備で削平される地区である。調査地区の名称は遺跡の西から1区、2区と呼称し、2区については、2a区と2b区に区分けした。そして、1区の東半分には約1～1.5mの厚さの盛土が認められたことと、園場整備で遺構が削平されないことが確認されたことから、発掘調査は削平される西側部分のみ実施した。

1区の土層堆積状況は、地山である黄褐色粘質土の上に造成土である暗茶褐色土が全域に堆積していた。この暗茶褐色土内には縄文時代後期、弥生時代中期の土器、奈良時代の須恵器、近世の陶磁器、鉄滓が包含されていた。遺構は全て地山面で検出されている。

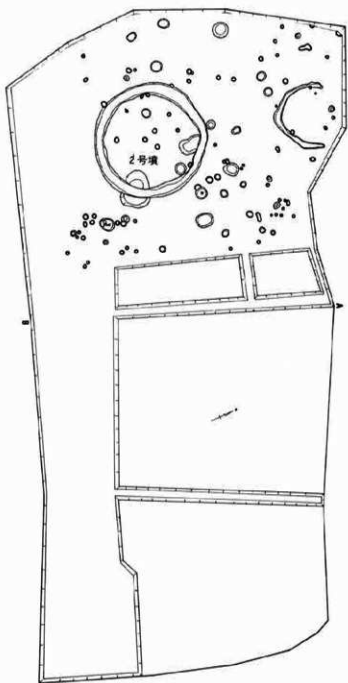
2a、2b区の基本土層は(1)耕作土、(2)造成土、(3)地山の3つに区分することができる。特に造成土が両区とも北に厚く堆積していた。この造成土内には弥生時代中期、後期の土器、古墳、奈良時代の須恵器、平安、室町時代の土師器、鎌倉時代の白磁、勝間田焼、瓦質土器そして縄文時代のものと考えられる打製石斧などが包含していた。なお、遺構は地山面で検出されている。

1区 (第2図)

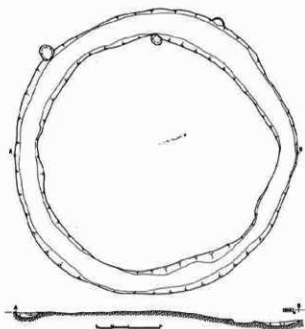
この調査区では、柱穴、土壌、古墳1基が検出されている。古墳は検出された順序で遺構番号をつけているため、2号墳と呼んでいる。

2号墳 (第3図)

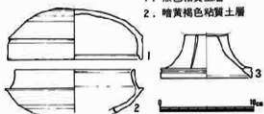
墳丘は削平されているため、内部主体等は不明であるが、周濠が明瞭に残っていたため規模



第2図 第1地点1区遺構全体図 (S = 1/300)



1. 黒色粘質土層
2. 暗黄褐色粘質土層



第3図 2号墳平・断面図(S=1/120)と出土遺物(S=1/4)

は確認できた。古墳の規模は直径9m, 周遶幅0.7~1.1m, 現存深さ0.1~0.3mを測る。遺物は周遶底部に須恵器(杯蓋杯身, 高杯)が出土している。

遺物(第3図)

(1)と(2)はセットになる須恵器である。(1)の口径は14.2cm, 器高5.3cmを測り, 色調は灰黄色を呈する。ヘラケズリは杯蓋中心より天井部の $\frac{1}{3}$ にまで至る。

「左回り」である。(2)は口径12.6cmを測り, 色調は灰黄色を呈する。ヘラケズリは底部から体部にかけて $\frac{1}{2}$ 程におよぶものである。口縁端部は(1), (2)ともやや甘く仕上げられ, 内側に段をもつものである。(3)は4つのスカシ窓をもつ短脚一段の高杯である。色調は暗青灰色を呈し, 胎土, 焼成とも良好である。

2a区 (第4~6図)

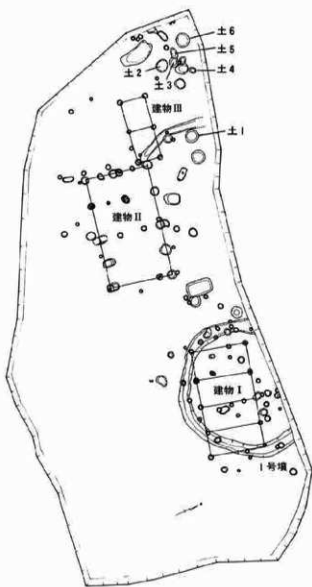
この調査区では古墳1基, 掘立柱建物3棟, 土壌等が検出された。古墳は1号墳と呼んでいる。

1号墳 (第5図)

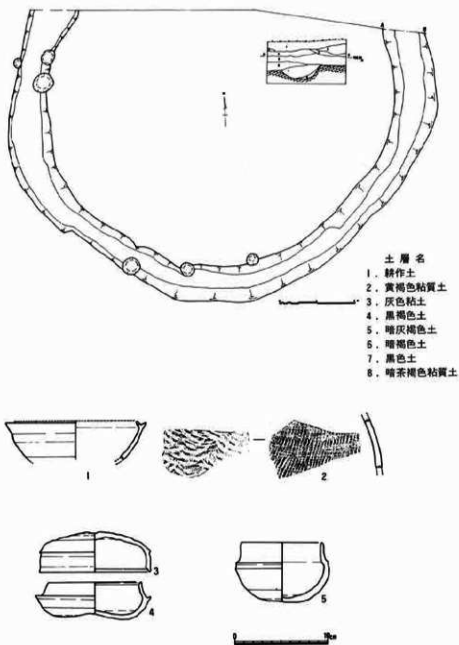
墳丘は削平されているため, 内部主体は不明であるが, 周遶が約 $\frac{1}{2}$ 程残っていたため規模は確認できた。古墳の規模は直径11m, 周遶幅0.8~1.2m, 現存深さ0.15~0.55mを測る。遺物は周遶上層と底面で須恵器(杯蓋, 杯身, 甕, 埴)が出土している。

遺物 (第5図)

(1), (2)は周遶上層, (3), (4)は底面で出土したものである。(1)は杯身である。推定口径13.2cmを測り, 色調は灰黒色を呈する。ヘラケズリが低部近くにみられる。(2)は甕の胴部である。内外



第4图 第1地点2a区遺構全体图 (S = 1/300)



第5図 第1地点2a区1号墳平・断面図(S=1/100)と出土遺物(S=1/4)

面とも叩目痕跡がみとめられる。色調は灰色を呈する。(3)、(4)はセットで検出された須恵器である。(3)は口径11.8cm、器高4.1cmを測り、色調は暗灰青色を呈する。ヘラケズリは杯蓋中心より天井部の $\frac{1}{2}$ にまで至る。「左回り」である。(4)は口径10cm、器高3.9cmを測り、色調は暗灰青色を呈する。ヘラケズリは底部から体部にかけて $\frac{1}{2}$ に及ぶ。口縁端部は(3)、(4)ともやや甘く仕上げられているが、いずれも内側に段をもつものである。(5)は口径8.7cm、器高6.2cmを測り、色調は暗灰色を呈する。ヘラケズリは底部から体部にかけて $\frac{1}{2}$ 程みられる。「左回り」である。口縁部はやや内湾ぎみに立上り、端部は丸味をもつ。

建物Ⅰ (第6図)

調査区の東側、1号墳が削平後に構築された東西方向に棟をもつ建物である。建物の規模は梁間2間(4.30m)×桁行4間(8.5m)である。柱間は梁行が130cmと300cmと不均等であるが、桁行はほぼ220cmの等間で、柱穴掘り方は30~50cm、深さ30~60cmほどである。C-01は抜き取り痕がある柱穴で、中から唐津系の椀(第7図5)が出土している。

建物Ⅱ (第6図)

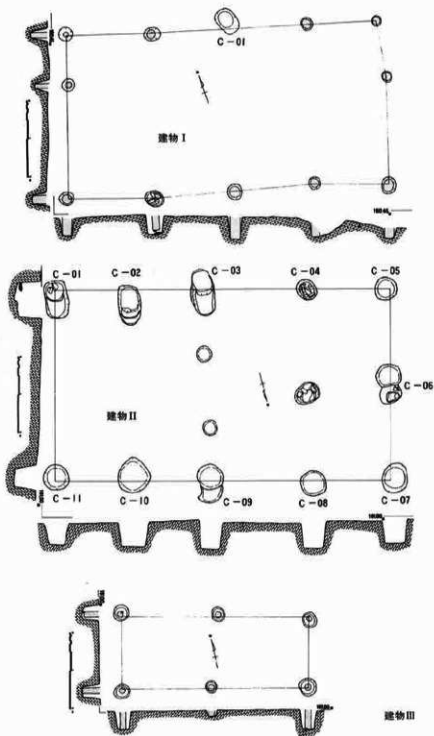
調査区の中央から少し西寄りに、東西方向に棟をもつ建物である。建物の規模は梁間2間(5m)×桁行4間(8.9m)である。柱間は梁行が2.5m、桁行は2m等間と2.5mがある。柱穴掘り方は50~70cm、深さ60~80cmである。東の棟持ち柱は入念な調査をしたにもかかわらず検出されなかった。C-01~03、06、09は抜き取り痕跡がある柱穴で、C-02からは土師器の高杯脚部、須恵器の杯身(第7図7、8)C-07からは瀬戸系の椀(第7図6)が出土している。なお、C-01他3個の柱穴には礎盤状の石がみられた。

建物Ⅲ (第6図)

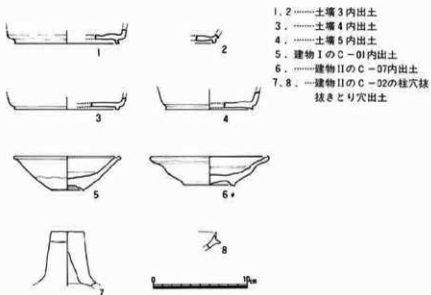
建物Ⅱに接し、東西方向に棟をもつ建物である。建物の規模は梁間2間(1.9m)×桁行2間(5m)である。柱間は桁行が2.5mの等間で、柱穴掘り方は30~50cm、深さ20~60cmである。いずれも柱痕跡が認められる。

遺構に伴う遺物 (第7図)

1、2は土壌3に伴う遺物である。1は推定脚部径11cm、やや八の字形に近い高台が付いている。色調は灰色を呈する。3は土壌4から出土した。推定脚部径11cm、ほぼ直立する高台がつき、色調は灰色を呈する。4は土壌5から出土した。推定脚部径9.2cm、八の字形に高台はつくが、端部はヘラケズリである。5は建物Ⅰの柱穴内から出土したもので、口径11.3cm、器高3.6cmを測る椀である。口縁端部、体部の内側には段がつき、底部は上げ底である。色調は外面が黄緑色を呈する。唐津地方で生産されたものと考えられる。6は建物Ⅱの柱穴内から出土したもので、口径12.4cm、器高3cmを測る椀である。器形は5とほぼ同じであるが、底部に糸切り痕があり、内面には重ね焼きの痕跡をとどめている。色調は外面が茶褐色を呈する。



第6图 第I地点2a区建物I, II, III平·断面图 (S=1/100)



第7図 第1地点2a区遺構内出土遺物 (S=1/4)

胎土内には砂が多い。5と同じ生産地と考えられる。7, 8は建物IIの柱穴抜き取り穴から出土した土器である。7は土師器の高杯脚部, 8は須恵器の杯身である。

これらの遺物の年代は, 7が古墳時代前期, 8が古墳時代後期に属し, 1~4は奈良時代の高台付杯身である。5, 6は室町時代に属し, 建物の時期決定に重要な遺物である。

2b区 (第8~10図)

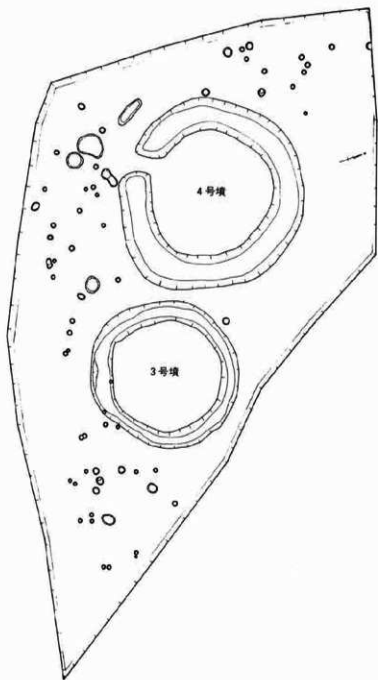
この調査区では古墳2基, 土壌, 柱穴等が検出された。ここでは3号墳と4号墳の概要について述べる。

3号墳 (第9図)

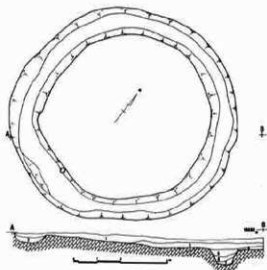
墳丘は削平されているため, 内部主体は不明であるが, 周濠が残っているため規模は確認できた。古墳の規模は直径9.2m, 周濠幅1.2m, 現存深さ30~60cmを測る。周濠の掘削は北~北東部分(斜面側)において極端に深いのが特徴である。遺物としては弥生時代終末~古式土師器の細片が出土しているが, 本古墳の築造時期を決定する遺物はない。

4号墳 (第9, 10図)

墳丘は削平されているため, 内部主体は不明であるが, 周濠が残っているため規模は確認できた。古墳の規模は直径12m, 周濠幅2~2.4m, 現存深さ40~60cmを測る。なお, 周濠の南西一部が幅約1m掘削されずに土橋状に残っていた。遺物は周濠内より弥生時代中期, 土師器の土器, 鉄斧, 鋤先, 鉄鏃, 須恵器(杯蓋, 杯身)が出土した。

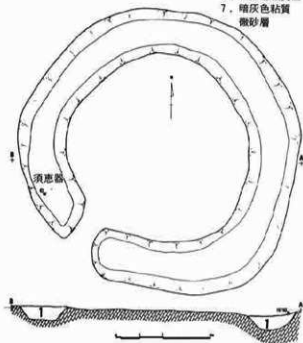


第8图 第1地点2b区遺構全体图 (S=1/240)



3号墳

1. 黒褐色粘質土
2. 黒褐色粘質土
(粘土ブロックが混入)
3. 黒褐色粘質土
(小円礫など含む)
4. 暗褐色粘質土
5. 黒褐色粘質土
6. 暗茶色粘質土
7. 暗灰色粘質
微砂層



4号墳

1. 暗茶褐色粘質土

遺物 (第10図)

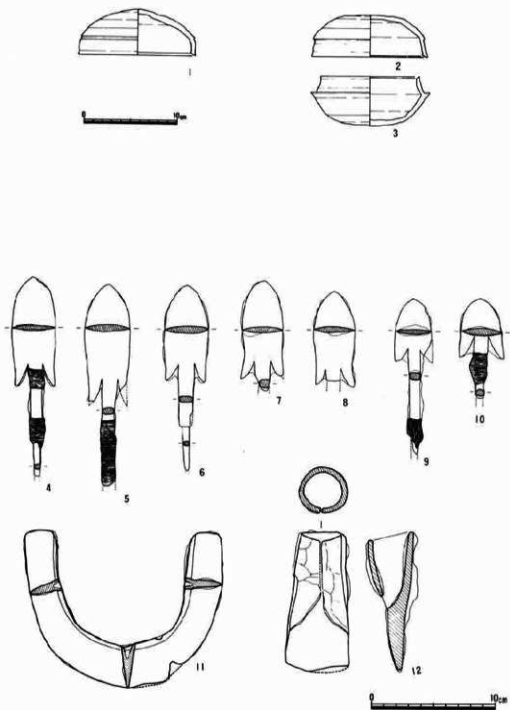
1は杯蓋である。口径12.5cm, 器高4.9cmを測り, 色調は暗青色を呈する。ヘラケズリは杯蓋中心より天井部の $\frac{1}{3}$ におよぶ。

「右回り」である。(2)は口径12.3cm, 器高4.4cmを測り, 色調は灰青色を呈する。ヘラケズリは杯蓋中心より天井部の $\frac{1}{3}$ におよぶ。「左回り」である。

(3)は(2)とセットで出土した。口径10.5cm, 器高5.2cmを測り, 色調は灰青色を呈する。ヘラケズリは底部から体部にかけて $\frac{1}{2}$ におよぶ。「左回り」である。

口縁端部はいづれもシャープに仕上げられ, (2), (3)は内側に段が付き, 鋭い稜線がつく。(4)~(10)は鉄鍔である。いづれも有茎平根腸杖式で, 扁平な両丸造りである。(4), (5), (10)には桜皮巻, (9)には木質が付着している。(11)は鍔先である。刃部は緩やかな曲線を呈する。U字形鍔先である。刃部の最大幅は16cm, 全長12.5cmを測る。(12)は中空の袋部をもつ無肩式の斧頭である。長さ11cm, 刃部幅5cmを測り, 全長に対して刃部幅の比率も $\frac{1}{3}$ 以上ある。

第9図 第1地点2b区3, 4号古墳平・断面図 (S=1/160)



第10图 4号墳周濠内出土遺物 (S=1/3, 1/4)

第2節 第2地点の調査概要

第2地点は道路敷部分と圃場整備で削平される地区である。調査地区はL字形になっているため、東側部分を1区、南北の調査区を2区とした。1区の土層堆積状況は、耕作土の直下が黄褐色の地山土となる地区が大部分であるが、東端部付近は2～3層の造成土層がある。

遺物は造成土層で近世陶磁器片がみられた。遺構は全て地山面で検出されている。

2区の土層は(1)耕作土、(2)黄褐色の造成土、(3)地山となる。造成土層は北に向うほど厚く堆積していた。この造成土層内には近世陶磁器、瓦、石臼などが包含している。遺構は1区と同様に地山面で検出された。

1区 (第11図)

この調査区では、土壌、溝、掘立柱建物、柱穴等が検出されている。なお、土壌の大部分は近世のものであるため省略している。

建物 I (第12図)

調査区の中央南側で、遺構の約半を檢出した。東西方向に棟をもち、梁間2間(+α)(3.8m)×桁行5間(10.8m)である。柱間は梁行が1.9m、桁行は2m等間と2.8mがある。柱穴掘り方は30～50cm、深さ40～60cmを測る。柱穴内から近世陶磁器片が出土している。

土壌 (第13図)

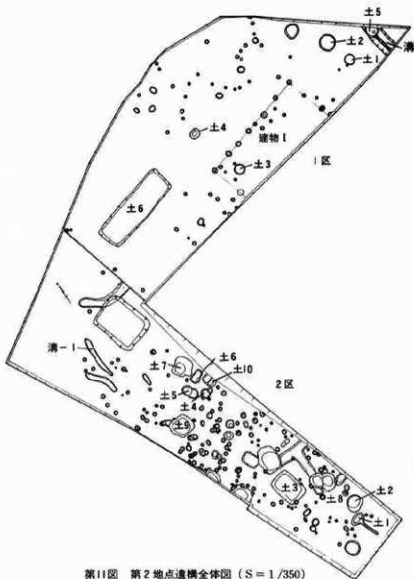
調査区の東端部において楕円形の土壌を檢出した。土壌の平面はやや楕円形を呈し、直径は上端部で100×95cm、下端部で約108cm、深さ35cmを測る袋状のものである。堆積土は暗茶褐色粘質土が1層だけである。遺物は底面から弥生時代終末の高杯脚部が出土している。

溝 (第14図)

調査区の東端部において檢出された。丘陵を南北に切断する様相を呈するもので、幅1.4m、深さ約30cmである。出土遺物は無い。

2区 (第11図)

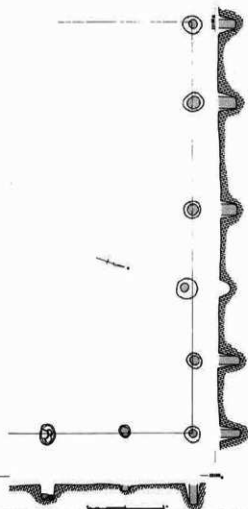
この地点は、かつて屋敷が存在していたことをこの地区の人々は記憶している。調査の結果柱穴、土壌、溝等を檢出したが、範囲が狭いため建物址としてもまとまらず、さらに、遺物が近世～現代のものばかりであるため、個々の遺構説明は割愛し、遺構に伴う遺物についてのみ



第11図 第2地点遺構全体図 (S = 1/350)

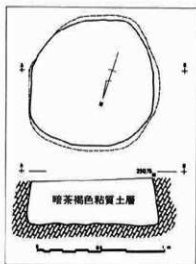
遺構に伴う遺物 (第15図)

(1), (2)は1区の土壌2内から出土した弥生時代後期の高杯である。(1)は推定口径21cmを測り、色調は赤褐色を呈する。(2)は丹塗りである。(3)は土壌5内から出土した。古墳時代後期の須恵器(杯身)である。この土壌内からは他に弥生時代もしくは古式土師器と思われる細片と近世陶磁器が出土している。(4)は土壌6内から出土した。備前焼の灯明皿である。(5), (6)は2区の土壌3内から出土した碗である。(5)は口径10.5cm, 器高7cmを測り、外面には灰青色の釉がみ



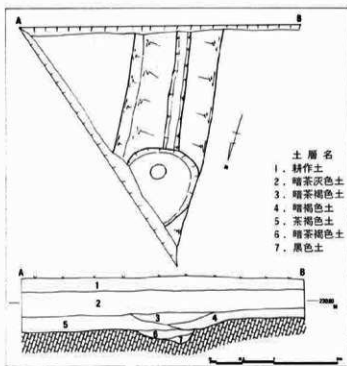
第12図 第2地点1区建物平・断面図(S=1/100)

られる。伊万里系の製品であろう。(6)は口径10cm, 器高6.4cmを測る。外面は暗茶褐色を呈するが, 白色の波状文が施されている。唐津の製品と思われる。(7)は土壌4内から出土した盤である。見込み部分に抽象化した動物のようなものが描かれ, 底部には不明文字がみられる。伊万里系の製品と考えられる。(8)は土壌8内から出土した備前焼である。口縁端部は外に折り曲げ, 玉縁状になる。色調は茶褐色を呈する。(9)は土壌5内から出土した。硬砂岩の石臼である。

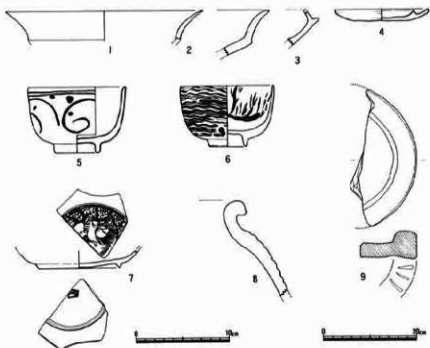


第13図 第2地点1区土壌1平・断面図(S=1/60)と出土遺物(S=1/4)





第14图 第2地点1区溝、柱穴平·断面图(S=1/60)



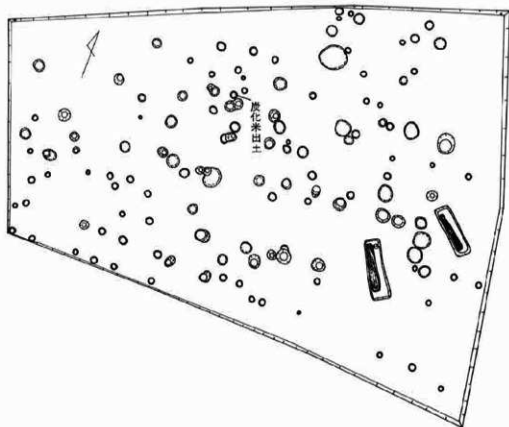
第15图 第2地点1, 2区遺構内出土遺物(S=1/4, 1/8)

第3節 第3地点の調査概要

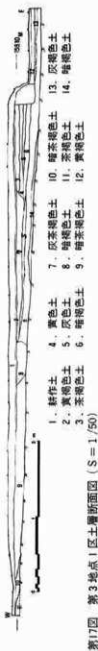
第3地点は圃場整備で削平される地区である。調査区は1区と2区に区分けして実施したが、1区は第2地点の約35m南に位置し、2区は1区の北東に位置するが、いずれも第2地点と同一丘陵上にある調査区である。

1区の土層堆積状況は基本的には(1)耕作土、(2)造成土、(3)地山に区分することができる。地山は西から東に下がっているため、造成土層は東に厚く、数枚の土層が確認できた。(第17図)遺物は造成土層と地山直上において、弥生時代中期の土器、古墳時代、奈良時代の須恵器、室町時代の備前焼等が出土した。遺構は茶褐色の地山面において検出している。

2区の土層堆積状況も基本的には1区と同じであるが、比較的造成土層が薄く、わずかに北東端部から東にかけて厚く堆積していた。遺物は縄文時代草創期と考えられる尖頭器、石鏃、



第16図 第3地点1区遺構全体図 (S=1/150)



古墳時代後期 奈良時代の須恵器、鎌倉時代の青磁、室町時代の備前焼、そして奈良時代の瓦などが造成土層及び地山直上において出土した。遺構は全て黄褐色の地山面において検出している。

1区 (第16図)

この調査区では柱穴、土壌が検出された。柱穴は弥生時代中期、奈良時代、近世の3種類がみられたが、建物にはまとめることができなかった。柱穴内出土遺物として69gの炭化米がある。これは弥生時代中期の土器と共存した。土壌は現代のものであり省略する。

2a区 (第18図)

この調査区では、掘立柱建物、溝状遺構、土壌、柱穴等が検出されている。

建物I (第19図(1))

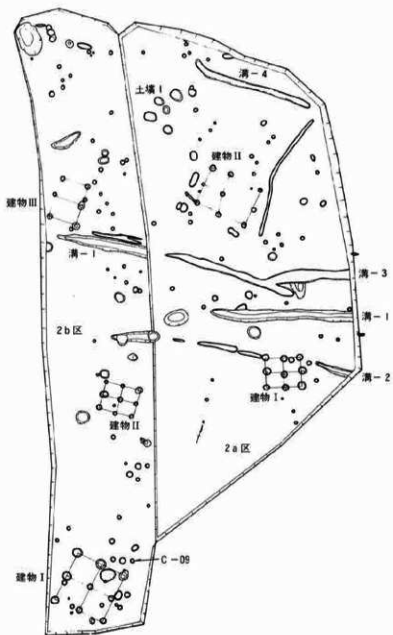
調査区の南端で、東西方向に棟をもつ建物である。建物の規模は梁間2間(2.4m)×桁行2間(3m)である。柱間は梁行が120cm、桁行は150cmの等間で、柱穴掘り方は40~70cm、深さは20~30cmである。柱痕跡は全て確認され、直径20cm程度である。

建物II (第19図(2))

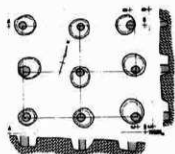
調査区の北側中央部で、東西方向に棟をもつ建物である。建物の規模は梁間2間(3.1m)×桁行2間(4.1m)である。柱間は梁行が1.5m~2.6m、桁行が1.4m×1.6mと不揃いである。柱穴掘り方は30~50cm、深さは30~40cmである。柱痕跡は全て確認できた。直径15cm~25cmである。

その他の遺構

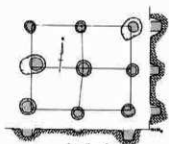
溝状遺構が4本検出されている。溝1は最大幅100cm、深さ



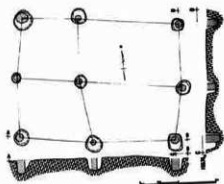
第18图 第3地点2a、b区遗構全体图 (S=1/300)



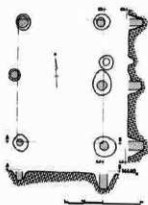
(1) 2a区建物 I



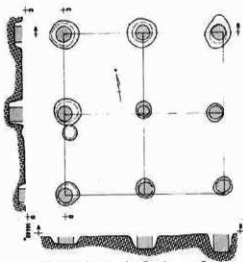
(4) 2b区建物 II



(2) 2a区建物 II



(5) 2b区建物 III



(3) 2b区建物 I

第19図 第3地点2区建物平・断面図
(S=1/100)

約47cmを測る。出土遺物としては弥生時代の土器、土師器、鉄滓がある。溝2は最大幅80cm、深さ23cmを測る。出土遺物はない。溝3は最大幅110cm、深さ21cmを測る。出土遺物としては土師器、奈良時代の須恵器破片、鉄滓がある。溝4は最大幅60cm、深さ17cmを測る。出土遺物としては土師器細片、古墳時代と奈良時代の須恵器がある。土壌1は楕円形を呈する。長径122cm×50cm、深さ17cmを測り、上層において土師器細片、奈良時代の須恵器が出土した。

2b区 (第18回)

この調査区では、孤立柱建物、溝状遺構、土壇、柱穴等が検出されている。

建物 I (第19回(3))

調査区の南端で検出された。東西方向に棟をもつと考えられる建物である。規模は梁間2間(4.2m)×桁行2間(4.2m)である。柱間はいずれも2.1mの等間で、柱穴掘り方は40~70cm、深さ20~50cmである。柱痕跡は全て確認されている。直径30~40cmである。

建物 II (第19回(4))

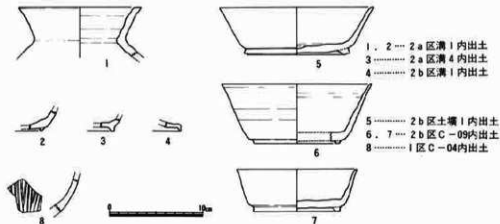
調査区の中央よりやや南、2a区の建物Iの西に約10m程の位置にある。東西方向に棟をもつ建物で、規模は梁間2間(2.2m)×桁行2間(2.6m)である。柱間は梁行が1.1m、桁行が1.3mの等間で、柱穴掘り方は30~60cm、深さは10~30cmである。柱痕跡は直径20~30cmであった。

建物 III (第19回(5))

調査区の北西部で検出された。南北方向に棟をもつと考えられる建物である。規模は梁間1間(2.2m)×桁行2間(3.2m)である。柱間は桁行が1.6mの等間で、柱穴掘り方は30~60cm、深さ25~40cmである。柱痕跡は直径20~30cmであった。

その他の遺構

溝状遺構は1本と土壇が2個あった。溝1は最大幅100cm、深さ15cmを測る。出土遺物とし



第20図 第3地点遺構内出土遺物 (S=1/4)

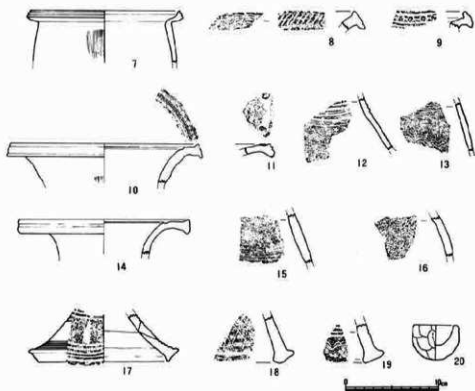
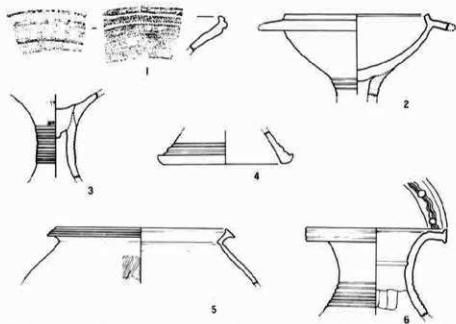
ては土師器、奈良時代の須恵器がある。

遺構に伴う遺物 (第20図)

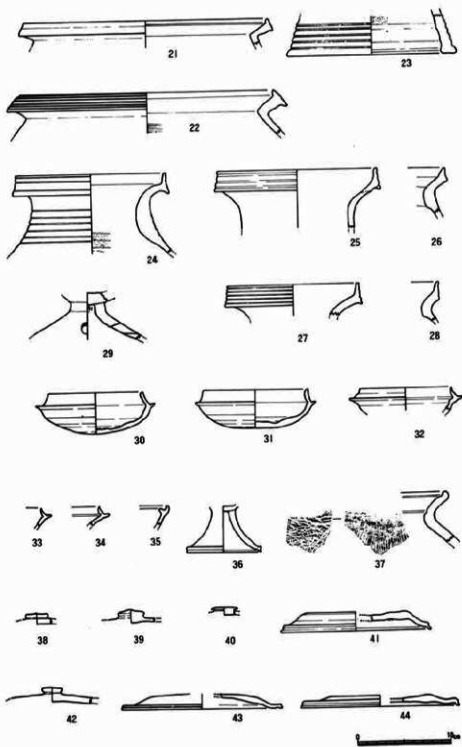
(1)～(3)は 2a 区から出土した。(1)は推定口径13cmを測る壺である。溝1から出土した。(4)～(7)は 2b 区から出土したものである。(5)は口径16.3cm, 器高5cmを測り、灰青色を呈する。口縁部は斜め上方に立ち上がり、端部は丸く仕上げている。高台の断面は台形に近い。土壌1から出土している。(6)は口径12.8cm, 器高4.5cmを測り、灰白色を呈する。口縁端部は丸く仕上げられ、高台の断面は四角形を呈している。(7)は推定口径15.9cm, 器高6.3cmを測り、暗灰色を呈する。口縁部は斜め上方に大きく立ち上がり、端部を丸く仕上げている。高台の断面は四角形を呈する。なお、器壁の内外面には、成形によって生じた凹凸がみられる。(6)、(7)は柱穴C-09内から出土したものである。(8)は1区のC-04から出土した龍泉窯系の青磁片である。

第4節 遺構に伴わない遺物 (第21図～26図)

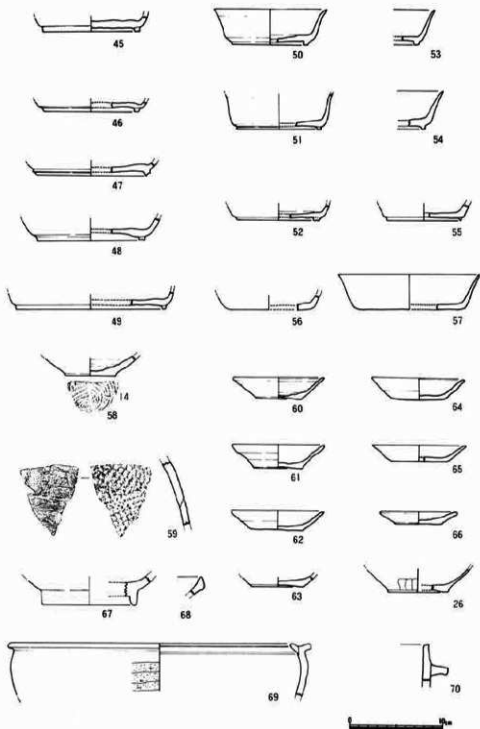
第1地点1区では縄文時代、弥生時代中期のものを図示した。(2)～(4)は高杯である。(1)は縄文時代後期の鉢形土器で、口縁端部に縄文が施されている。(5)は甕形、(6)は壺形土器である。いずれも弥生時代中期のものである。2区では弥生時代中期から鎌倉時代までのものを図示した。弥生時代中期のものとしては、(7)～(11)、(21)～(24)がある。甕形土器は(7)、(21)、(22)、壺は(8)～(16)、高杯は(17)～(19)、器台は(24)がある。後期に属するものは(20)、(23)～(29)である。壺は(24)、(25)、(27)、甕は(28)、(29)、高杯は(29)である。須恵器は6世紀前半～7世紀前半のもの(30)～(37)と8世紀中葉～後半のもの(38)～(57)に分けることができる。杯蓋(38)～(40)は全体に天井部のふくらみがなく、平担となり、つまみも肩平である。さらに、口縁部ではS字状に屈曲する。杯身は高台付のもの(49)～(59)と高台を有しない杯身(60)、(67)がある。平安時代に属するものとして、底部が糸切り痕跡をもつ土師器がある。鎌倉時代に属するものは(59)、(67)～(80)、(71)がある。(59)は勝田郡勝央町に所在する古窯址(勝間田焼)で生産されたと考えられる甕の胴部である。(68)は青磁片、(69)は白磁片、(70)、(71)は瓦質の羽釜である。(60)～(66)は一括で造成土内から出土したものである。口径は10cm, 器高2.5cmのもの、口径8.2cm, 器高1.3cmを測る2種類がある。胎土はいずれも精製粘土を使用し、色調は灰黄色ないし黄褐色を呈する。底部は(63)のように糸切り痕跡をもつものもある。このような土器は落合町須内遺跡の井戸(鎌倉～室町時代)からも出土しているが(注1)口径、器高からみて鎌倉時代に属すると考えられる。(70)は室町時代に属する土師器である。第3地点1区では弥生時代中期(7)～(74)、6世紀後半(75)、8世紀中葉～後半(76)～(80)、室町時代の備前焼スリ鉢(81)がある。



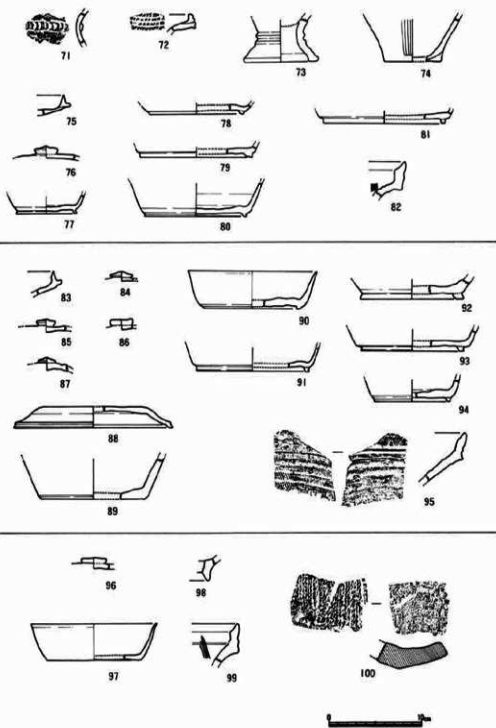
第21图 第1地点1区(1~6), 2区(7~20), 出土遗物(S=1/4)



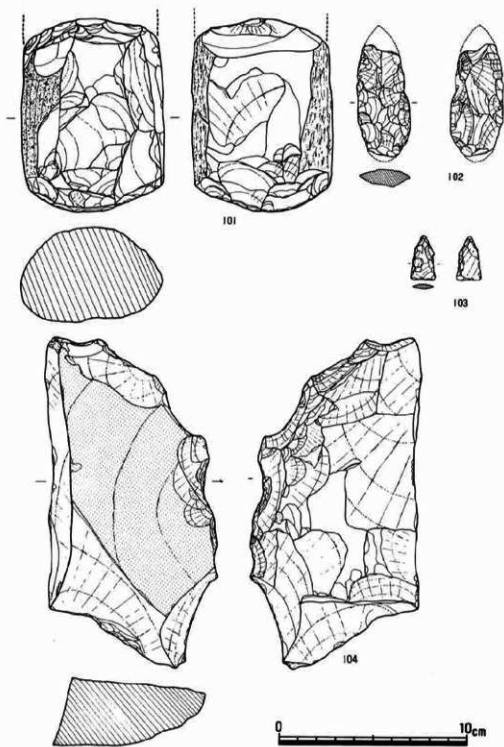
第22图 第1地点2区出土遗物 (S=1/4)



第23区 第1地点2区出土遗物 (S=1/4)



第24图 第3地点I区(71-82), 2a区(83-95), 2b区(96-100)出土遗物(S=1/4)



第25图 第1地点2区(101), 3地点2a区(104), 2b区(102, 103), 出土遗物(S = 1/2)

2a区で図示したものは6世紀後半03, 8世紀中葉～後半04～06, 室町時代09がある。杯蓋08は天井部が平坦であり, 口縁部はS字状に屈曲する。色調は灰青色を呈する。杯身09は口径13.8cm, 器高4cmを測り, 暗灰青色を呈する。口縁部は斜め上方に立ち上がり, 端部は丸く仕上げている。2b区で図示したものは8世紀代の須恵器06, 07, 鎌倉時代の青磁08, 室町時代の備前焼09, そして奈良時代の平瓦010が1点だけ出土している。

石器 (第25図)

本遺跡では石鏃, 尖頭器, 石斧, 石犁, 敲石, 凹石などが出土し, 剥片では黒曜石もみられる。ここに図示したものは打製石斧(01), 尖頭器(02), 石鏃(03), 石犁(04)である。(01)は上部が欠損した打製石斧である。側辺部の大部分は自然面が残る。石材は粘板岩と思われる。現重量は650g。縄文時代の所産のものと思われる。(02)は, 上, 下端部が欠損しているが, 木葉形尖頭器である。表は縁辺を加圧する押圧剝離の調整を行っている。裏は比較的に大きな剝離面を残しているが, 縁辺にこまかな調整が行われている。現存長は5.7cm, 最大幅2.7cm, 重量は1386gを測る。石材は流紋岩と思われる。縄文時代草創期所産のものであろう。(04)は石核状の形態を呈している。周辺は調整加工しており, 中央平坦部には磨石のような使用痕が認められ, 少し凹んでいる。石材はサヌカイトで, 重量は840gある。

注 (1) 岡山県教育委員会『須内遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書01 1976年

第5節 まとめ

今回の調査結果, 遺物では縄文時代から近世までのものが出土し, 遺構では弥生時代中期から近世までのものが検出された。特に注目すべき遺物としては縄文時代草創期の尖頭器(02), 打製石斧(01), 黒曜石片などをあげることができる。とりわけ, 尖頭器は草創期のものとしては岡山県北でも最初の出土例として今後類例の増加がまたれる遺物である。(04)は弥生時代所産の石器である。中央部の使用痕から礫石に転用したものと調査中は考えていた石器であるが, 石犁の可能性をもつ石器である。(注1)

須恵器は古墳時代のものとして歴史時代のものに大別することができるが, 歴史時代のもは大部分が8世紀中葉～後葉にかけての遺物であることから, 本遺跡の性格を知るうえで重要なものであった。

遺構では古墳と掘立柱建物が目ざされる。検出された古墳はいずれも墳丘が削平されていたことから規模や内部主体等については不明な点が多いが, 周濠内の出土遺物からみて1～4号墳はいずれも6世紀前葉のものであり, 横穴式石室採用以前の時期に築造されたと考えられる

古墳群であった。

第1地点付近では現在1基(注2)が確認されているが、今回の調査で検出された古墳を加えると少なくとも5基以上の古墳群で形成されていたことが明らかになったことである。これらの群集墳の中では4号墳→2号墳→1号墳の築造順位が考えられるが(注3)、いずれもあまり大きな時期差がないものであるといえる。

この日名谷には現在までに後期古墳を中心に37基の古墳が知られているが、日名24号墳(注4)を除いていずれも横穴式石室墳であり、6世紀中葉以降に築造されたものである。前方後円墳である日名13号墳、同20号墳においても6世紀中葉に築造され、7世紀前半まで追葬されたものであるため、この日名谷地区の古墳群では最古の群集墳であったことが確認できたことは大きな成果であった。この地区だけでなく、旭川右岸沿いの丘陵及び端部には6世紀中葉頃から爆発的に古墳が築造されているが、これは当時の村落の実態が小規模な個別経営にもかかわらず、旭川による沖積化された地域及び丘陵端部の開発がかなり大規模に行われたことよって初めて群集墳の形成が可能であったと思われる。

掘立柱建物は合計9棟検出されたが、特に奈良時代の建物と考えられる遺構は第3地点でのみ検出された。2a区の建物I、2b区の建物I、IIが相当する。いずれも東西方向に棟をもつ2間×2間の総柱建物であり、倉庫と考えられる遺構である。これらの遺構は出土遺物からみて、8世紀中葉～後半のものと考えられる施設であった。

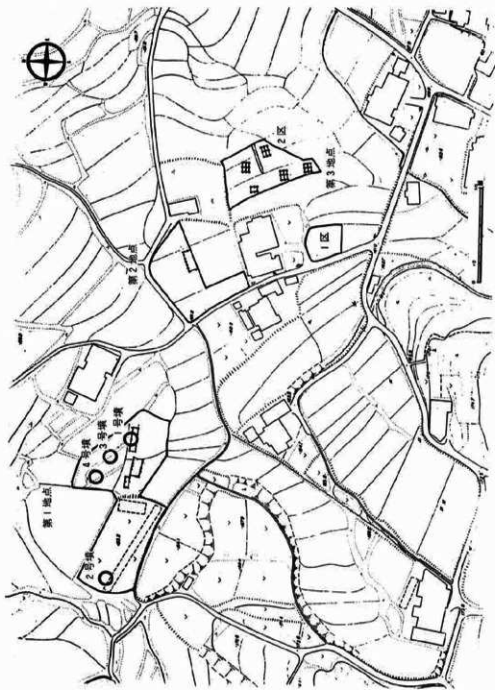
今回検出された遺構の性格については、発掘調査範囲が限定されていたことからみて問題は残るが、いずれも倉庫と推定されるものばかりであったことから、もし官衙遺跡の性格を想定させるものと仮定するならば(注5)、これらの遺構は群衙に付属する施設である倉院か真嶋郷に設置された郷倉の可能性をもつものと考えることができよう。

真嶋郡衙の設置場所については、真嶋郷に比定する見解が有力であるが、鹿田郷に郡衙を想定する考え(注6)もあるため、今後さらに検討すべき状況になってきたと云うことができる。

いづれにしろ、本遺跡は律令国家体制が確固たる時期になってつくられたものであり、倉院もしくは郷倉の一部を構成する可能性の強い遺跡であることを提示しておきたい。

(松本和男)

- 注 (1) 岡山県高本遺跡出土の石槌のように、中央部に一定方向の条痕は認められないが、部分的に一定方向の条痕があることから極めて類似性の強い石器といえる。(高橋潤氏の御教示による)岡山県埋蔵文化財発掘調査報告88所収「高本遺跡」岡山県教育委員会 1975年
- (2) 日名古墳群1号 落合町遺跡番号No. 229
- (3) 3号墳については時期が不明であるが、恐らく横穴式石室採用前に築造され、他の古墳との時期差はあまり無いものと考えている。ここでは築造順位から除外している。
- (4) 内部主体は箱式石棺と考えられている古墳である。落合町遺跡番号 No. 252
- (5) 本遺跡の性格については、昭和56年度の確認調査では真嶋郡衙を想定する結果はでなかったが、現在のところ全く否定はできない。「高屋B散布地、堀田A・B散布地」岡山県教育委員会 1981年
- (6) 落合町鹿田の郡遺跡では筆者は実見していないが、平面視及び奈良時代の須恵器が出土している。しかし、郡遺跡と高屋B遺跡の時期差は不明であるため、郡遺跡の時期、性格等についても早急な確認が必要である。



第26図 高屋B遺跡遺構全体図 (S = 1/1000)

(1) 高屋B遺跡遠景(北西から)



(2) 第一地点遠景(東から)



(3) 第一地点一区遺構全景(北東から)





(1) 二号墳周溝内遺物出土状況(南西から)



(2) 第一地点2a区遺構全景(西から)



(3) 2a区一号墳全景(南から)

(1) 一号墳周溝内遺物出土状況(北西から)



(2) 第一地点2b区遺構(三号、四号墳)全景(西から)



(3) 四号墳周溝内遺物出土状況(北西から)



図版 4



(1) 第二地点一区遺構全景(南から)



(2) 第二地点二区遺構全景(西から)

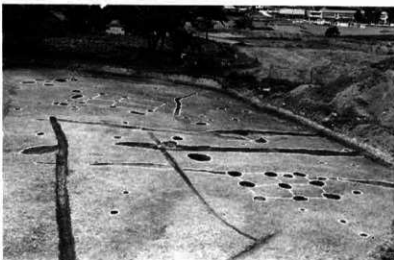


(3) 第三地点一、二区全景(南東から)

(1) 第3地点一区遺構全景(南西から)

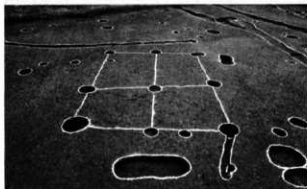


(2) 第3地点2a区遺構全景(南から)



(3) 2a区建物I全景(南から)

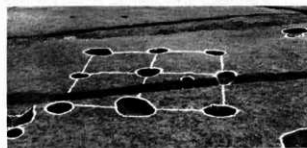




(1) 2a区建物II全景(南から)



(2) 第3地点2b区遺構と建物I全景(南から)



(3) 2b区建物II全景
(南西から)



(4) 2b区建物III全景(南西から)



1号墳出土



4号墳出土



4号墳出土



第3地点2b区出土
(表)



(裏)



2号墳出土



第2地点出土



第 1 地点出土



第 1 地点出土



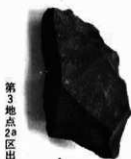
第 1 地点出土



第 1 地点出土

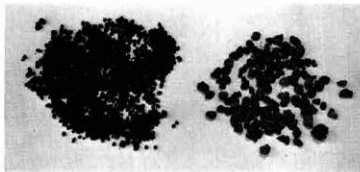


第 1 地点出土



第 3 地点 2 区出土

A



第 3 地点 1 区出土

出土 遗 物



B

落合町埋蔵文化財発掘調査報告

福田 A 遺跡

高屋 B 遺跡

1983年 3 月 20 日 印刷

1983年 3 月 30 日 発行

編集
発行

落合町教育委員会

岡山県真庭郡落合町垂水618

